

〔別 名〕 大綱、けんか綱

〔伝 承 地〕 薩摩川内市西向田町・大小路町

〔実施時期〕 秋分の日の前日

〔実施場所〕 薩摩川内市西向田町・大小路町の国道3号線

〔伝承組織〕 川内大綱引保存会

〔名称〕

川内大綱引。通称として「けんか綱」と言われてきたが、平成二六年度から川内大綱引保存会及び川内大綱引実行委員会では、通称としての「けんか綱」という表現を使用しないこととしている。地元では単に「大綱」とも言う。

〔実施場所〕

綱引は、現在、薩摩川内市西向田町・大小路町の国道三号線の上で行われる。

綱引の行われる場所は、向田、向田、大小路の順番で三年で一サイクルになる。これはかつて、大小路、向田本町、太平橋通りの三か所の持ち回りで行われていた名残で、向田本町と太平橋通りが「向田側」として場所が一箇所になったが、回数はそのまま二回行うためである。調査時の平成二九年は、川内大綱引が薩摩川内市西向田町太平橋通り（国道三号線）で行われた。

綱練は、綱引が向田で行われる時は、県道四三号線の向田交差点と西開聞交差点（県道川内・串木野線）の間の通称神田通りを通行止めにして、また、綱引が大小路で行われる時は、県道四四号線の大小路交差点と宮内交差点の間を通行止めにして行われる。

現在に近い形で行われる「川内の綱引」の最も古い記録は、明治



西向田町・大小路町周辺



押し隊の攻め合い

四（一九〇七）年の『鹿児島新聞』九月二六日付けの新聞で、「十五夜の日から大小路、開聞、向田上町、白和、向田等順次毎晩一八日夜まで四日間行われた。」とある。

大正二（一九一三）年には、「旧暦八月一日に大字宮崎、一日に白和町、新町、大小路、竹馬場など、一七日には向田上町、一八日は向田本町で行われた。」と新聞にある。

その翌大正三年には、鉄道の全線開通を受けて、各町が勝手に決めた日程を話し合いで調整することになり、合わせて実施場所も調整し、向田町、新道通り、大小路、白和町の四か所に集約して実施することを決定した。

この後も、向田町や大小路を中心に複数の実施場所が入れ替わりながら、全体として川内の大綱引として続けられていった。

〔実施時期〕

平成二九年の川内大綱引は、九月二二日金曜日に行われた。午前六時から、国道三号線に接続する県道四三号線を通行止めにし、綱練を行い、綱が練り上がった午後三時頃に片側車線を通行止めにした国道三号線に引き出す。本綱と呼ばれる大綱引本番は、午後七時からダン木祭りという神事を行い、午後八時一五分から始まる。

本来は旧暦八月一日に行われていたが、現在は、開催の便を考慮し、祝日である秋分の日の前日に行われている。

前項でも示したが、明治四〇（一九〇七）年の『鹿児島新聞』九月二六日付の新聞で、「十五夜の日から大小路、開聞、向田上町、白和、向田等順次毎晩一八日夜まで四日間行われた。」とあり、当時は、複数箇所旧暦八月一日を中心数日にわたって行われていたことが分かる。また、その翌大正三年には、鉄道川内線（川内町駅―鹿児島駅間）の全線開通を受けて、各町が勝手に決めていた日程を話し合いで調整することになり、併せて実施場所も調整し、向田町、新道通り、大小路及び白和町の四か所に集約して実施することを決定した。これに伴い、新暦一〇月四日（十四夜）は大小路及び白和

町、五日（十五夜）は新道通り及び向田町で行われた。

第二次世界大戦中の昭和一八（一九四三）年の新聞に、「昼間に綱引を行い、海軍撮影班が、その様子を撮影し、戦地の慰問とした。」とある。その翌年の昭和一九年、二〇年、二一年と綱引は中止され、戦後昭和二二年から再び行われるようになった。

〔伝承組織〕

現在は、川内大綱引保存会があり、保存会のもとに、年ごとに川内大綱引実行委員会が組織され運営されている。保存会には、会長一人、副会長、相談役が複数名いる。実行委員会は毎年組織替えが行われ、実行委員長、副委員長のもと、広報部、施設部、審判部、総務部及び子ども綱引部などを組織し全体の業務に当たるとともに、綱を引く組織である上方、下方にそれぞれ「本部」が置かれる。上方本部、下方本部にはそれぞれ、本部長、一番太鼓、大将、押大将、わさ長の五役がある。役職も増える傾向にあり、かつては、一番太鼓、大将、押大将をもって三役と呼んでおり、それよりも前は、現在本部長・大将の役も一番太鼓が担っていた。

戦前の運営母体がどのような形態であったか記録はないが、大正三年の新聞記事には、綱引の日程について「向田、白和、大小路三ヶ町の有志及び委員の人々会合し協議に協議を重ね」たが、決まらず、「其後更に川内実業倶楽部部員を始め三ヶ町の有志の人々昨夜実業倶楽部に最後の決定を与うべく集会協議」したことが、記されている。この頃から、商工経済団体が関与するようになったとも推測できるが、むしろ「有志」が中心であったことが伺える。聞き取りでは、昭和に入ってから川内内部屋という草相撲の団体が綱引に関わるようになったようだ。戦後の川内大綱引の復興もこの相撲部屋の尽力があったという。その後、大綱引は町内会主催になり、昭和三九年からは向田連合青年会が主宰するようになった。向田連合青年会は、それまで各町内毎に七つの青年会があったのをまとめたものである。昭和六〇年には川内大綱引保存会ができた。時代と共に

人口は減少し、それに伴う若者層の減少により、その運営方法も労力の軽減化などが図られるようになってきた。

かつては、運営方法などを先輩や前回の実行委員などにあの手この手で話を聞き伝授されたと言うが、担い手の減少などから、徐々にシステム化され、平成一四年には『川内大綱引手順書』が作成され、マニュアル化が図られるようになった。

〔由来・伝承〕

川内大綱引は、本来旧暦八月一日に行われており、明治大正期には、複数か所で行われる綱引の総称として「川内の綱引」と呼ばれていたことから、民俗学的には、鹿児島県内各地で行われている、いわゆる「十五夜綱引」の一つであると考えられる。

従来、川内大綱引は、一五九七（慶長二）年の慶長の役に出兵する島津義弘が士気を高めるために行ったのが始まりとされてきた。一九九九（平成一一）年の川内市（現薩摩川内市）無形民俗文化財に指定された際の告示では「川内大綱引は、一般的に慶長年間の頃に島津義弘にちなんで始まったと言われている。」とされ、二〇〇六（平成一八）年の鹿児島県無形民俗文化財に指定された時の調査資料には「文禄・慶長の役によって、慶長年間（一五九六～一六一五）に始まった。」とされている。

また、郷中教育の中で綱引が奨励されたことに川内大綱引の起源を求める考え方も地元ではある。例えば、北川鉄三の『薩摩の郷中教育』の中には、郷中教育の年中行事の項に、「八月一五日夜に二才（青年）の監督の下に稚児（少年）一同綱引きを催す」とある。

しかし、郷中教育における綱引に関する記述は、明治以降の記録に見えていだけで、必ずしも慶長年間に綱引が奨励された直接的証拠があるわけではない。慶長年間に新納忠元によって推奨された郷中教育に綱引の起源を求めるのは難しいようだ。

〔実施内容〕

1 準備

川内大綱引の準備は、前の年の綱引が終わった次の日から始まるとよく言われているが、近年は綱にする稲藁が不足していることから、休耕田などを活用して、保存会で稲作も行っている。このため、前の年の春から大綱引の準備は始まっていると言える。かつては、稲藁は近在の農家から集めていたようで、その後は、藁縄を購入してその縄を綱に練っていた。平成一五、六年頃までは藁縄を機械で製造している業者に発注していたが、その後その業者が廃業したので、藁縄製造機を譲り受け、現在は、保存会で藁縄から製作している。少なくとも、前年の稲の刈り入れ後、二台の藁縄機で藁縄を作り始める。



写真1 用意された藁縄

当該年に入ると保存会役員会で、本綱、子ども綱の会場及び開催日が決定される。二月には保存会総会、別の日に当年の実行委員会の事前協議（人選）が行われ、四月の理事会で実行委員長が決定される。五月には第一回の実行委員会が実施され、本格的にその年の大綱引の準備が始まる。

2 ルール

ルールは毎年少しずつ変更されており、結果、地元の方でも世代によってどのように運用していくべきかについての考え方が分かれている。ルールの改正は、主に前年の反省材料を改善する方向で行われる。特に県指定無形民俗文化財になってからは、公序良俗に反しない形での開催を理想として、様々な規則を作っている。

さて、そのルールだが、川内大綱引は、一般的な綱引とはかなり異なったルールで行われている。綱は一本綱。沖縄や韓国、東南ア

ジヤなどでは二本の綱をつなぎ合わせて引くことが多いが、川内の大綱は一本綱で、保存会の発表では三六五メートルある。太さは四〇センチメートル、重さは七トン。綱の両端に「ワサ」と呼ばれる内径が一メートル弱の輪がある。

会場（国道三号線）の中央には「ダンギ」と呼ばれる赤く塗られた丸太が垂直に埋め込まれ、高さ七五センチメートル地上に杭状に出ている。元の長さが、一メートル五〇センチメートルなので、埋め込み部も七五センチメートル、丁度半分埋まっていることになる。ダンギの上部には藁縄が巻きつけてある。

次に、参加者は、上方（かみかた）と下方（しもかた）に分かれ、綱を引く。上方は赤い旗と鉢巻、下方は白い旗と鉢巻を使用する。上方下方は、それぞれ、太鼓隊、引き隊、押し隊、ワサ係の四つの隊で構成される。まず、引き隊。この人たちが綱を引く。次に太鼓隊。一番太鼓から一〇番太鼓まで一〇人いる。本部長、大将の役がなかったときは、一番太鼓が上方、下方のそれぞれの指揮官であった。一番太鼓が太鼓をたたくことで、その組の引き隊が綱を引く。一番太鼓から一〇番太鼓までが、長い綱にそって中央から最後尾まで均等に並んでいて、一番太鼓が太鼓をたたき出したら、その音を聞き二番太鼓が太鼓を鳴らし、その音を聞いて三番太鼓が太鼓をたたき、というかたちで、伝令のように綱を引くタイミングを引き隊に知らせるのが、太鼓隊の役割だ。単純な計算だが、三六五メートルの綱の半分に配置されるので一八二・五メートルの距離に一〇人、約一八メートル間隔での配置ということだ。それから、これが川内大綱引の大きな特徴だが、押し隊という役割がある。これは、綱の中央付近で、相手方の引き隊の邪魔をする役割を担っている。また、自陣の引き隊の邪魔をする敵の押し隊を蹴散らす役割もになっている。最後のワサ係は、綱の最後尾にある輪（ワサ）をダンギにける役割を担っている。

綱引自体は、審判長が上方、下方の一番太鼓を綱の中央のダンギのあるところに寄せ、両手で同時に両方の一番太鼓の背中をたたき、

開始を知らせる。これを「綱を割る（綱割）（つなわり）」と呼んでいる。この合図と同時に双方の一番太鼓が太鼓をたたき、二番太鼓、三番太鼓と打ち鳴らししていく。双方の引き隊が綱を引き始めると同時に、双方の押し隊が相手の引き隊めがけて突進する。現在は、綱割直後の押し隊は上方下方それぞれ二五〇人としている。綱が一度動き始めると止めることが難しい。どちらかに綱が引つ張られたら、ワサ隊がワサ部分を中央部（ダンギ）へ先に移動させて、ワサをダンギにかける。こうすることで、綱は相手陣営に引き切られることなく停止する。ここが、また他の綱引きとの違いである。川内大綱引では、一度相手側まで綱が引かれて、自陣の綱の最後尾のワサが中央線であるダンギまで来ても、ダンギにワサが引つかかっているそれ以上引かれなければ、まだ負けではない。いったんここで綱は止まり、両陣営とも綱を引くのをやめる。

ここから、負けている陣営は、時宜をはかり時を待つ。一番太鼓が大事になってくるのはここからだ。相手陣営の様子を見ながら、隙があれば、一番太鼓をならして引き始める。うまく引けることもあれば、綱が動かないこともある。うまく引ければ、一度動き出すと止められないので、負けていた側に綱が引き寄せられる。綱を引かれた側は、ワサをダンギにかけて綱を止める。このやりとりを繰り返して、現在のルールでは午後九時四〇分頃に審判員の一人が綱の中央をのこぎりで切断し、綱引は終わる。この時、綱の中央が自陣にあった方が勝ちとなる。現在は終わりの時間はほぼ分かっている。で、どのタイミングで自陣に引き寄せておくか、自陣に引き寄せたらいかに引き返されないようにするかが川内大綱引の見所である。様々な「作戦」があるが、「引き縄」をいつどのくらい使うかというのも作戦上の大事な判断となる。引き縄は四メートルほどの細い藁縄で、大綱につないで使う。大綱を直接持つて引くのではなく、引き縄を引くことで引きやすくするために用いる。かつては、この引き縄を多く作った方が勝ちやすくなったので、上方下方で同じ本数にすることになり、現在では上方下方が事前（九月一〇日）に集

まっで一緒に引き縄を作成して、半分に分け合う方式になった。同じ本数で、一度切れたら二度と使つてはいけないルールなので、どの時間帯に何本使うかということが、勝敗を分けることにもつながる。

3 綱練

川内大綱引で使う綱は、直径四〇センチメートル、長さ三六五メートル、重さ七トンにもなり、毎年新しく作られている。

綱引の当日の午前六時から概ね午後三時頃までの時間をかけて、保存会の綱練指導員の指導の下、実行委員会を中心に約一五〇〇人の市民の力で、三六五本の縄を一本の大綱に練り上げる。市内の様々な団体が綱練に参加している。役所職員や市議会議員、川内駐屯地の自衛隊員及び市内の高校生などである。



写真2 シンコを入れて藁縄の3つの束を1本に練る。

県道四三号川内串木野線（通称神田通り）を午前六時から通行止めにして、全長四二〇メートルの道路を使つて綱練を行う。まず、道路の両端には綱に縊りを加えるために「立山（たてやま）」、「寄山（よせやま）」と呼ばれる二つの大きなやぐらを設置する。

立山は、道路に掘った穴に入れて固定されている。ダンギ同様県道に許可をとって穴が開けてあり、普段は鉄製の蓋がしてある。寄山からの縊りで練られた三本の綱を練り上げていく時に綱を固定しておく山である。

寄山は、一二二本、一二二本、一二一本ずつにまとめられた三つの縄の束それぞれにヨリを加えていく山である。寄山は、固定され

ておらず、綱に縊りが入って縮むために少しずつ固定された立山の方に寄つていくので寄山と呼ばれる。

「縄出」三六五本の藁縄を一二本ずつ、軽トラックに載せて荷台から道路に繰り出していき、一二本を八回、一二本を一回で一二二本、一二本を九回と一三本一回で一二一本として、一二二本、一二二本、一二一本ずつにまとめられた三つの縄の束を全長四二〇メートルの立山と寄山の間に渡していく。

寄山のギツチョと呼ばれるハンドルを回して三つの束それぞれに縊りをかけていく。この際、一五〇〇人の参加者が藁縄で束を持ち上げたり回したりしながら、縊りをかけていく。

三つの束それぞれに縊りがかかったら、次にその三つの束を一本に縊る作業を行う。ここでは「シンコ」と呼ばれるガイドをつけて、今度は立山の方のギツチョを回して大綱全体に縊りをかけていく。シンコは、上方、下方の三役を中心に、立山側から寄山側へ、三本の束を一本の大綱に練りながら進めていく。

最後に、ワサ作りと化粧を行う。川内大綱引の綱の特徴である両端のワサと呼ばれる輪を作る。上方、下方、それぞれで自陣側のワサをワサ係が中心になり作る。大綱の中心は、化粧縄が巻かれ赤く塗られる。

途中、昼食休憩を挟みながら、午後三時頃、大綱は完成し、縊り掛けに参加した一五〇〇人で肩に担ぎ上げ、片側の交通規制が始まった国道三号線の道路上に搬出される。三六五メートルもの長さで七トンもの重さのある綱が人力で六車線道路に運ばれるさまは、それだけで迫力がある。

4 大綱引本番

午後七時の花火の合図でダン木祭が始まる。新田神社の宮司をはじめとする神職が神事を執り行う。薩摩川内市長、市議会議長なども参加し、玉串奉奠を行う。その他保存会長、実行委員長、上方下方三役などが玉串奉奠を行う。入場の際は、一番太鼓、大将、押し

大将の三役は三列で太鼓を叩きながら入場する。ダン木祭終了後に上方下方の三役は、お互いの健闘を誓って握手をする。ダン木祭終了後、本綱が始まるまでの間アトラクションがある。

午後八時一五分、綱割。綱割は綱引開始のことを言い、両陣営が一斉に綱を引き始める。ルールのところでも記したが、この時の押し隊は、上方下方それぞれ二五〇人（大将・押大将と馬を含む）に制限されている。本年はまず、上方が綱を自陣に引き寄せた。ルール改正の成果もあるか、何度か綱が上方下方を行き来した。近年、一回目の引きで、引かれた側のワサがダンギにかからず、そのまま引き切られて開始から数分で終わってしまった。一回引いてそのまま綱が一時間半動かず終わったということがある、見ていてつまらないという声が多かった。この複数列のやり取りがあったのは保存会の思惑通りの綱引となったのではないだろうか。

最終的には午後九時四〇分頃、綱にのこぎりが入り、綱が切れ、上方の勝利で終わった。

終了の合図があり、上方下方の四役は太鼓隊とともに太鼓を叩きながら中心へ集結し、審判長から判定を聞くと、太鼓を叩きお互いの健闘を称え合い握手をした。最後は、審判長の音頭により大綱三本締めを行い、踵を返して上方下方それぞれ背中を向けて太鼓を叩きながら自陣へと引き上げていく。

この後、実行委員会による国道三号線の清掃作業がある。本綱参加者は、そのまま上方下方のそれぞれの本部に戻り、そこで酒宴が



写真3 綱の中央でのダンギ祭り

行われる。

「その他の特徴」

二〇一五年ユネスコの無形文化遺産に登録された大韓民国慶尚南道昌寧郡靈山大綱引の保存会と川内大綱引保存会とは、平成一年に靈山大綱引保存会が川内大綱引四〇〇年祭に参加する以前から交流し、単に綱引にとどまらない濃密な関係を築いてきた。その成果として平成二四年に薩摩川内市と昌寧郡は、友好都市締結協定書を締結した。民間外交が行政を動かした形だ。

「意義・考察」

川内大綱引は、鹿児島県下各地で行われている十五夜綱引の一つでありながら、古くからの商業地域で行われている点にまず特徴がある。また、現在の大きな特徴としてワサと呼ばれる輪があることで、綱引のルールが複雑化している点がある。さらに現状としては、これだけ大規模な綱引が鹿児島県下の他の地域では見られなくなっている点である。

沖縄県の大綱曳や朝鮮半島の綱引と比較してもその独自性は際立ち、どちらから伝播したとしても変化が著しいと言えるだろう。

鹿児島県下の十五夜綱引を代表する綱引だと言え、ワサやダンギなどがある点で世界的な視野でも独自性の高い綱引だと言える。

「参考文献」

- ・小野重朗 一九七二 『十五夜綱引の研究』 慶友社
 - ・下野敏見 一九八九 「十五夜綱引の源流―門之浦のヨコビキによせて」 『東シナ海文化圏の民俗』 未来社
 - ・井上賢一 二〇一一 「薩摩半島における十五夜行事の構造」 『南九州市薩南文化』 第三号、南九州市立図書館編・発行所収
- (小島 摩文)

節浴（シチャミ）

- 〔別 名〕 節折目（シチュンミ）
- 〔伝 承地〕 大島郡喜界島ほぼ全域
- 〔実施時期〕 旧暦八月初丁
- 〔実施場所〕 各集落の各家庭
- 〔伝承組織〕 各家庭

〔名称〕

奄美諸島では旧暦八月が節の重要な折目にあたる。このことから節折り目（シチュンミ）と言われ、この日に子どもの邪悪を祓い健やかな成長と成功を祈り、身を清める節浴（シチャミ）という儀礼のことである。

〔実施場所〕

以前は、各集落内にある泉（湧水）や井戸端で行っていたが、各集落内にある泉が各家庭の水道の水源地となったため、井戸のある家庭を除き、ほとんどの家庭はその水道水で行っている。

〔実施時期〕

旧暦八月初丁と決まっており、現在でもこの日は守られている。

〔伝承組織〕

各集落内、各家庭で曾祖母・祖母・母・娘・孫へと代々女性たちが伝承している。

〔由来伝承〕

喜界島では新節を節折目（シチュンミ）と言い、〇歳から一〇歳



塩道集落周辺



子どもを清める

までの子どもたちは節浴（シチャミ）を行う。
いつ頃から始められたかは不明であるが、子どもの邪悪を祓い健やかな成長を祈り、水で清める儀式を行う。

節浴（シチャミ）の行い方や行う場所は各集落、各家庭によってまちまちである。

いくつかの集落の例を聞き取り調査から紹介する。

1 志戸桶

七歳までの子どもに行う。上川（ウインガー）の泉で小石を水の中から拾って家に持ち帰り、ミカンの木の股に置く。女子用はデーカー（小さな竹）、男子用はススキを切ってきて、赤飯または白飯を少し頭に載せ、洗面器に上川から汲んできた水を入れ、この水にデーカーやススキを浸け「フデリー、フデリー（大きくなれ、大きくなれ）」と唱えながら三回振りかける。使った後のデーカーとススキは葉先を丸めて庭の隅に置く。

2 花良治

以前は集落の山手近くにあるウフンジュという泉（ハンダガワ）（写真1）の所で行っていたが、今は各家庭の水道水で行っている。ウフンジュで小さな石を拾って持ち帰り、ミカンの木の股に置く。これはミカンがたくさんなるようにとの願いを込めている。

朝早く、おにぎりを作ってサネン葉に包んで持つて行く。このご飯を少し頭に載せて、大きい子はウフンジュの水の中に入って体を清めた。水が冷たいので小さな子はこの水で体を拭いてもらった。

アーガヤ（茅）で小さな俵様に作った中におにぎりをそれぞれ一個ずつ入れ、五個から七個のつながりを作り上部を結びこれを二つ一組として、米が取れるようにとの願いを込めミカンの木に掛けた。
○歳から七歳まで行い、八・九歳は休み、一〇歳で終わる。これを止めシチャミと言った。

3 荒木

庭先にあるスズバチ（石で作った手洗い鉢）に井戸水を汲んで入れ、この中に飯粒を入れ、この飯粒を頭の上に置いてスズバチの水で顔と頭を洗う。

4 小野津

節浴をする泉（雁股、ウツカー）には次のような伝説がある。
「一六六五年保元の乱に敗れた源為朝は伊豆大島に流されたが、数年後、沖繩に向かう途中、喜界島小野津沖からはるかに見える島に向かつて雁股の矢を放った。島に上陸した源為朝は地中深く刺さっていた矢を抜き取ったところ、そこから清水がコンコンと湧き、きれいな泉となった。源為朝は航海の無事の感謝とこれからの無事を祈って「小野津八幡神社」を建てた」この泉を「雁股の泉」と言い、節浴のとき使っていた。

このように、集落によって行い方はまちまちである。

【実施内容】

節浴（シチャミ）を行う日時は旧暦八月初丁の早朝と決まっている。で、見ることができるのはごく近くの集落のみである。

塩道集落で二か所実地調査を行ったのでその様子を報告する。

1（Aさん宅）

午前六時過ぎから準備を始め、七時から始まった。四か月のひ孫さんの初シチャミで、この集落では〇歳から八歳まで行い、九歳は休み一〇歳は止めシチャミである。

行う場所は自宅井戸端で、お膳の上に井戸水を入れる洗面器、線香二本、お重箱に赤飯を入れ、酒器（カラという）にお神酒を入れ、箸一人前とお膳の横にススキ三本（長さ約一三〇センチメートル）、その横に初シチャミで使う海から取ってきた砂を洗面器に入れ準備してある（写真2）。この海砂は初シチャミの時だけ砂を踏む儀式をする。子どもの厄払いと元気で丈夫に育つようにとの祈願である。
家の玄関先から敷地内にある井戸の所にススキと砂の入った洗面器を持った孫の祖母を先頭に、母親がお膳を持ち曾祖母・孫、関係

者が続く。

井戸端で曾祖母がシチャミ用の最初の水を洗面器に入れ、その中に赤飯を少しとお神酒を入れ、火をつけた線香を前に置く。曾祖母がシチャミの水の中にススキを浸し、そのススキで最初に初シチャミの子に「フデリョー、フデリョー」と言いながら三回振る。その後、海砂を踏ませる（写真3）。初シチャミの子が終わったらもう一人のシチャミをする。シチャミで使った三本のススキは葉先を丸めミカンの木の股の所に置く（写真4）。このススキは月日が経つうちに自然に帰って行く

初シチャミが終わった後、子どもへのお祝いを貰ったところへ赤飯を配る。

2 (Bさん宅)

このお宅でも曾祖母・祖母・母・子どもで行う。○歳（アラシチャミと言う。）から七歳まで行い八・九歳は休み、十歳で止めシチャミ（ツシチャミ）と言う。

始まる前にススキを取りに行く。水道水を洗面器に入れ、赤飯とお神酒を少し入れ、火をつけた線香二本を洗面器の両縁に置き、ススキ三本を水に浸して子どもの頭のてっぺん（つむじの所）に赤飯を少し置き（写真5）、一本のススキで一回ずつ三回水を振りかける（写真6）。子どもが三人いたら一人につきススキ三本必要であるので九本のススキを準備する。赤飯もお神酒も、それぞれ子ども一人分用意し、一人ひとり別々に行う。洗面器の水も一人ずつ行うので三回汲みかえる。

終わったら、子どもに赤飯を少し食べさせ（写真7）、見物人や参加者などにもお神酒と赤飯が振る舞われる。ススキは葉先を丸めて軒下に人数分全部置く（写真8）。今年の古いススキは庭先に置く。

【意義・考察】

先に述べたように八月は奄美諸島では節折目（シチウンミ）と言

い、節を大きく分けると春と秋の二つの節となり、その折目の日である。

床の間や先祖棚の花を変え、墓参りをする日でもある。節折目は旧暦八月初丁（ひのと）で、節折目から五日目の辛（かのと）の日がシバサシ（ススキのこと）で柴を床の間や先祖棚、墓、井戸やすべての家屋、畜舎、便所などにも挿す。この日の大切なことは先祖まつりである。柴を挿してある所には悪神邪霊が入ってこないと言われている。節折目から七日目をナンカビと言ひ、シバサシに使ったススキを束にまとめて刃先を丸めて門の外に立てかけて置く。これで節折目の行事は終わる。

節浴（シチャミ）で使ったススキをミカンの木の股に置くことと小石を拾ってきてミカンの木の股に置くという行為は「なり木ぜめ」の一つと考えることができるのではないだろうか。

節の折目であるので先祖を敬ひ、子どもの健やかな成長を祈り邪悪なものが来ないように祓い清める。

節折目の大切な行事である「節浴（シチャミ）」も簡素化されたり、該当する子どもがいなかったりという理由から伝承者が年々減少していることも現実ではあるが、節浴（シチャミ）は子供の厄払いということで昔ながらの方法で行っておられる家々も少なからずある。子どもの健やかな成長を祈って続けてもらいたい行事の一つである。

また、聞き取り調査で話しておられた長老によると、節折目は「節正月（シチシヨウガツ）」とか「大節（ウフシチ）」とも呼ぶと話しておられた。

【参考文献】

- ・喜界町誌編纂委員会 二〇〇一 『喜界町誌』 喜界町
- ・竹内 譲 一九六九 『喜界島の民俗』 黒潮文化会

（牧島 知子）



写真6 頭に赤飯を載せた子
どもを清める



写真5 頭に赤飯を載せて
もらった子ども



写真1 以前シチャミをしていた泉



写真7 子どもに赤飯を食べさせる



写真2 シチャミ用一式



写真3 初シチャミで海砂を踏ませる様子



写真8 シチャミで使ったススキ
を軒下に置く



写真4 ミカンの木の股に
置かれたススキ

43

さとちまんじんじゃ
ないしまい
里八幡神社の内侍舞

- 〔別 名〕 八幡神社例大祭
 〔伝 承 地〕 薩摩川内市里町里
 〔実施時期〕 毎年旧暦九月一八、一九日に近い土曜、日曜日
 〔実施場所〕 里八幡神社
 〔伝承組織〕 内侍舞保存会

〔名称〕

行事名は正式には「里八幡神社秋の例大祭」であるが、「内侍舞」とは、この例大祭の主たる神事、奉納舞の名称である。地域の人にとっては行事名といってよいものだが、実際には舞の後に珍しい直会（なおらい）や、二日目午後には、境内の土俵で行われる相撲および相撲甚句の唄踊りが行われる。

なお、二日、神社での内侍舞のあとに、八幡神社から離れた讃之元神社でも同じ宮司のもと例祭を行うが、同じ女子による内侍舞が舞われる。この神社の入口の案内板には、「巫女舞」が奉納されると書かれている。

〔実施場所〕

「内侍舞」とその前後の神事は社殿で行われるが、相撲、相撲甚句の唄踊りは境内に常設の土俵で行われる。

〔実施時期〕

かつては旧暦九月一八日・一九日に行われていた。その理由は、不詳。近年は参加者の勤め等の関係から、この日に近い土日となった。



里集落周辺



内侍舞

「伝承組織」

内侍舞は内侍舞保存会が行い、相撲、相撲甚句はその保存会が実施主体となっている。里町里は、さらに複数の自治会に分かれているが、実施に当たっては毎年順繰りに巡ってくる、いわゆる当番制になっている。

「由来・伝承」

里八幡神社は現薩摩川内市の新田神社から分祀された神社とされるが、時期、経緯などは不詳である。ただ内侍舞がこの分祀の時に伝わったことは確かであるとされる。祭りの内容のどれほどが受け継がれたものか必ずしも明らかではない。なお、内侍舞の「内侍」は、奈良朝時代にあった役職名といわれている。

また、内侍舞の後のに行われる相撲の歴史は長いが、相撲甚句はその歌詞から明治以降のものだと分かる。

なお、この「内侍舞」は県の無形民俗文化財に指定されている。

「参加者の資格」

祝詞奏上、お祓いなどの神事は全体に神社に所属する宮司が中心となっていく。

その他、内侍舞などの実施主体は大方、里地区の人たちである。ただ、里はさらに四つの地域に分かれているので、毎年いずれかの地域が担当する。

内侍舞の舞い手（マチジョウ）は、かつては一〇歳から一二歳までの女子一人が務めた。子どもが多い時代は、神籤で選ばれていたが、少子化で該当者が少なくなった今日、小学生から中学生の中から数年前に決められる。相撲は子どもから青年までが参加する。相撲甚句の踊りは保存会会員が受け持つ。内侍舞の前後には、供物を捧げたり直会（神祭りの後の納会）の行事が神殿で行われるが、その給仕役などは主に当番地域の青年の役割である。

「祭りの準備」

内侍舞が行われる二〇日ほど前に、保存会会長と舞の指導役（当日は介添え役もする。）が、舞い手の家に挨拶に行く。下着や白足袋の準備をするために舞女からサイズを聞いたり、祭りや当日の段取りなどを告げる。舞のための特殊な装束、鈴などは普段は神社に保存されている。

正式に着装するのは化粧などとともに本職に頼むが、襦袢の上に鳥居門のついた着物、髪は長いカモジ（添え髪）を背に垂らし、赤い綿を包んだ太い紐六本で飾った真鍮製の冠をかぶる。舞には、着物の上に麻製の打掛けを羽織るのだが、これは社殿で舞の前に介添え役の女性が着せる。

正式な舞の稽古は、今はビデオがあるので覚えやすくなり、四日前の夜から始めれば覚えるという。前日は、直会に携わる人たちと合同練習をする。

舞の後の直会ではお神酒と、一の膳（海の物）、二の膳（山の物）、それぞれの後に肴、干物と昆布が出る。料理は当日だが材料の準備は数日前から行われる。

午後の相撲は、常設の土俵があ



写真2 内侍舞の様子②



写真1 内侍舞の様子①

るので、前日に左綱を撚り、土俵が丸くなるように周りを埋める。相撲甚句の踊りの練習も二日くらい前から行われる。これは天候が悪いと中止されることもある。

「祭りの実施内容」

一日目の内侍舞は夕方六時頃より始まる。宮司、舞女（マチジョ）その母、介添え役の女性、その他、神社側の関係者、かつ招待された地域の人たち、ないし合わせて一五、六人ほどが、盛装して社殿に集い、舞の場を囲むように並べられた床几に掛ける。その位置は、宮司をはじめ神事を行う側の人は神殿に向かって左の壁、招かれた知名人は右の壁、舞女、その母、介添え役女性が並んで、神殿に向かう位置に掛ける。

一般の観客は、開放された正面入口から見ることになる。ただ、社殿の中を外からのぞくように見られる二つの窓がある。

舞が始まる前に、宮司の祝詞やお祓い、供物の奉納、参列者の玉串奉納などが続き、そのあと内侍舞が始まる。踊りのテンポ、リズムを決めるのは、宮司による太鼓の音だけで、他の楽器といえ、舞女が持つ鈴である。



写真3 料理が運ばれる



写真4 直会の様子

踊りの振りは複雑なものではないが、順序や回数ばかりと決まっている。右手に鈴を持ち、それを目の高さに突き出すようにし、一方左手は肩をつまむようにして、しずしずと社殿の中を反時計回り、ないし時計回りに、四角く一巡する。神前で鈴を振りながらぐるぐるの両手を外向きに回すというのが、主たる動きである。大方この組み合わせで舞は進み、合わせて二回巡ることになる。舞女がトランス状態になる時代もあったかもしれないが、今は終始通常の意識である。

舞自体はおよそ二〇分程度で終わるが、そのあと、参列者全員が社殿に残って、直会（納会）が行われる。舞の観客も残って見る人がいるが、この直会には厳かな中にも興味をそそる演出があるからである。

直会のための酒や料理の準備は、社のすぐ近くの御供所といわれる小さな家で準備される。社殿には長机が置かれ、参列者はその前の床几に腰かける。給仕は二人一組で順次行われるが、酒、料理は御供所から下給仕二人が受け取り、それをさらに上給仕二人にそれぞれ手渡す。直接参列者に給仕するのは上給仕の方である。

ところで、宮司と上席の客人には、空の酒、空の吸い物を出すのが、この直会の独特なところである。あくまで、それらをおいしうに飲み、頂戴しなければいけない。今は一つの儀礼として厳かに行われるが、かつては周りから野次が飛ぶこともあったと言う。

これが終わって、次に全員に酒や料理が振舞われるが、ここにもある仕掛けが施される。料理人が何人かの人の吸い物の中に硬いままの栗や、半煮えの里芋など、食べられないものを入れておくのだ



写真5 おもてなしをうける宮司

と言う。それに当たった人は、苦笑いをするのでみんなには分かる。大らかな笑いを誘う直会である。こうして、一日目にすべき祭事は終わり、祭りに関係した多くの人は改めて打ち上げを行う。

二日目は午前八時半ころから始まるが、午前中は昨夜と同じ内侍舞とそれに関わる祭事がそっくり繰り返される。

ついで午後には、恒例の相撲大会と相撲甚句の歌と踊りが披露される。相撲は子どもたちの部と大人たちの部に分かれる。中には親子で勝負する場面を見られる。合い間に里地域が誇る「相撲甚句」が披露されるが、日露戦争で夫が戦死し、それを弔う未亡人が出てきて、明治以降の歌であることが分かる。こうしてこの祭りは終了する。

〔他地域の同系行事〕

後に挙げた参考文献「里村八幡神社の内侍舞Ⅰ」によれば、昔は上甕島の他地域にも内侍舞があった。これが今は里のいか所になつてしまったようである。

鹿児島県下では、指宿市山川成川の南方神社に、里のものと近い形の内侍舞があり、また、十島村口之島の霜月祭に行われる内侍神楽には、シャーマニスティックな要素があり、むしろ古い形式を有しているという。

〔意義〕

内侍舞の踊り手は、今はそれほど名残が感じられないとしても神の依り代的存在だったという点で、極めて貴重な存在である。

なお、直会における宮司、客に空酒、空吸い物を勧める儀礼や、食べられないものを客に供する行為は、たとえ古い伝承ではないとしても日本人の伝統的な宗教観を現しているもののように思う。

そして、この祭りは、豊年を祝う秋祭りでありながら、あくまで内侍舞が主体となっていることも重要である。

〔参考文献〕

- ・塩田甚志編 一九八五 『里村郷土誌』 里村郷土誌編纂委員会
- ・下野敏見 一九九九 「里村八幡神社の内侍舞Ⅰ」 『鹿児島県文化財調査報告書第四五集』 所収
- ・下野敏見 二〇一三 『南日本の民俗文化誌八 南日本の民芸芸能誌』 南方新社
- ・日笠山正治記プリント 二〇一一 『八幡神社の内侍舞・古式直会』
- ・日笠山正治編『西海の甕島、里村のことばと暮らし』二〇一七 里村のことばと暮らし刊行会

(小川 学夫)

※ 写真は全て薩摩川内市教育委員会上甕島教育課提供

ぼう
坊ほぜどん

別名 祇園祭

〔伝承地〕南さつま市坊津町坊

〔実施時期〕毎年一〇月第三日曜日

〔実施場所〕 坊八坂神社と三集落の公民館

〔傳承組織〕 祇園祭実行委員会

〔名称〕

坊八坂神社における御神幸行列を伴う秋の祭礼で、地区民には「ほげどん（豊祭殿）」として親しまれている。正式には神事を八坂神社秋季例大祭、祭礼全体を祇園祭と称しているが、鹿児島市のように「おぎおんさあ」と呼ばれることはない。

〔実施場所〕

坊八坂神社での内祭の後、御旅所になる公民館へ御遷幸し、翌日に御旅所から坊八坂神社へ御還幸する。御旅所はもともとは船主の家で、戦後倶楽部（集落公民館）、その後町立児童館、現在は再び集落公民館となっている。御旅所になる集落公民館は三つあり、鳥越↓中坊↑上之坊が毎年順番に務める。この三公民館が御旅所となっているのは、明治四三年に一宮大明神（下浜）、霧島六所権現（上之坊）、熊野権現（鳥越）が、合祀されたことによると言う。

〔実施時期〕

もともとの祭礼日は、旧暦九月一五日で、明治四二年から大正二二年まで新暦
 一月一五日、大正一三年から新暦二〇月一五日であつた。昭和五九年からは新
 暦二〇月第三日曜日になった。一五日に固定されていた頃は、平日になつてい



南さつま市坊津町坊付近地区



写真1 十二冠女

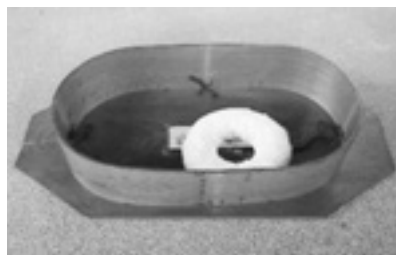


写真2 サイセンバコ

ると学校を午後から休みにしてもらい、地区挙げての祭りとしてやっていた。

〔伝承組織〕

八坂神社氏子総代会・祇園祭実行委員会（坊ほぜどん実行委員会）の主催。神事を執り行う八坂神社の氏子の範囲は、神社のある坊之浜、明治四二年に八坂神社に合祀された神社の元氏子であった中坊・上之坊・鳥越。御旅所にはならないが、坊之浜集落も氏子で、直会の当番もある。下浜・上中坊は別の神社を祀っている。松ヶ迫は新しい集落。祭礼を行う実行委員会は、大字坊のすべての集落と各種団体が構成されており、御神幸行列は地区挙げての行事。

〔由来伝承〕

坊津に配流された近衛信輔（信尹）に由縁が深いとも伝えられ、無病息災に豊漁・豊作・商売繁盛を願う。

〔実施内容〕

1 内祭

祭りは前夜祭となる「内祭」と、翌日の「本祭」からなる。内祭の神事のあと御旅所への御遷幸、本祭の神事のあと神社への御遷幸がみられる。御遷幸では十二冠女と呼ばれる桶を頭上に載せた少女たちの美しい行列が見られる。じゅうにかんめ

内祭は、八坂神社で行われる宵祭り、元は一日の潮が満ちるのを待って神事を行った。現在は午後七時から行う。

神事後、御旅所への御神幸がある。行列の順序は、高張燈提の明かりのもと、①大鉾、②真禰、③祭具（鳥毛、槍、旗など）、④楽器（太鼓、笛、手拍子）、⑤神官（伶人）、⑥社旗、⑦御輿の順で、その後ろから御供奉が続く。この御遷幸には十二冠女は付かない。

御旅所（今は公民館）に着くと、午前〇時から神事、神舞が始まり、泊まって寝ずの番をする。

元坊津町立歴史館長が主宰していた坊津史談会の「昭和五九年十月十九日坊津史談会例会資料」では、内祭を「丑の刻祭（うつのまつい）」と記している。またこの資料によれば「御旅所は以前は浜の船主の家であったため、行列が早く着くので里人は『早くゆかないと見損う。』といって競って出かけたもの。」と言う。さらに、「夜は眠気さましに花桶（はなたんご）に甘酒をつくり、これを飲むのが習わしだった。」ともある。

2 本祭

本祭は御旅所で、元は一日の潮をみて神事を始めていた。現在は午後二時から神事、午後一時半から御遷幸がある。

御遷幸後、八坂神社で神事を執り行う。遷座、昇神（神主が、「うおー」という警蹕の声を出す）、修拔、献饌、祝詞奏上、玉串奉典、撤饌、閉扉、直会の順。現在は直会は坊泊地区公民館で行い、午後三時半からは奉納演芸祭がある。

昔は、この祭りのために、船止めしていたという。先の史談会資料によれば、この日は、泊は勿論、方々から親類縁者が集まる習わしで、坊の家庭では甘酒やごちそうをつくって歓待した。

3 御遷幸行列（十二冠女ほか）

ご還幸行列の順番は、①先払い、②シベ行列、③十二冠女、④囃子、⑤賽銭箱、⑥宮司・伶人、⑦社旗、⑧御輿、⑨御供奉となる。

この行列の周りを赤面・黒面という猿田彦面をつけ、棒を持った青年がいる。「群衆の整理に当たる。」と言われる。また獅子舞も付き、祭りの風情を出している。

① 払い 大鉾・下切型金幣・真禰・祭矛・大旗（錦旗）・祭具（鳥毛、紫翳、管翳、槍等）と続く。

② シベ行列 紙垂の付いた櫓を幼児が持ち、母親がそれにつきそっていくもの。このシベは祭りのあと各家庭にかざって魔除けにするという。シベ

は家内安全・無病息災を願って、各集落で配る。戦後、お金を取るようになった。

③ 十二冠女 振袖で着飾った少女たちが、御幣の付いた魚桶の

ものを頭上に載せた行列で、坊ほぜじんの特徴となっている。元は十二歳の少女二人が行った。鹿児島弁で「冠る」をカンメルと言い、そこから、この行列をジュウニカンメと呼ぶ。

少女たちが載せる魚桶は、カンメボウシとも、サイセンバコとも呼ばれる。名前のとおり賽銭箱の役目をし、道中で参拝者から賽銭をいただく。いただくときはかんで入れやすくする。賽銭が入ると重くなり、御神幸の終わりには母親が手を添えて支える。

実測したサイセンバコは、長さ六四センチメートル、幅二〇センチメートル、厚み〇・五センチメートルの底板に、長さ四八センチメートル、幅二六・五センチメートル、高さ二〇・五センチメートルの曲げ物を載せてある。底・曲げ物ともに杉製。それに高さ四三・五センチメートルのシベ（御幣）を四本差している。

前記の史談会資料によれば、由来は不明で、「明治元年にはなかった。」という。また人数は、「始めは数に制限がなかったらしいが途中で二二に限定されたりしい。」とある。

古老によれば、昔は晴れ着を準備するのも大変で、簡単には十二冠女にはさせられなかったという。戦後になると希望者も増えていったが、今度は過疎化でなり手が少なくなり、今は各集落で頼んでいるという。坊以外の人にも頼み、泊地区やゆかりのある市外の人にもしてもらっている。

④ 囃子 青い法被姿の青年の太鼓（台車）に乗せてある、同じく青年の手拍子、白衣に緋袴の少女による横笛と続く。

⑤ 賽銭箱 台車に乗せた大きなもの。

⑧ 神輿 台車に乗せてあるものを神社氏子役員が押す。上記「史談会資料」によれば、明治一七年の岩おこし風の人に神輿も壊れ、現在のものは明治二〇年頃坊の船主や船員が寄贈したもの。大正三年・昭和一八年・昭和四三年に



写真5 十二冠女 (1991年)



写真3 御神幸の先払い



写真6 八坂神社での神事



写真4 シベ行列

修理。

赤面・黒面 明治二〇年頃船主が寄贈したものと、中川喜次郎氏が昭和四〇年代寄贈したものがある。「面は酒を飲んでぶざけて、恐ろしいくらいだった」と言う。

獅子 大正三年に坊の機関士会が寄贈してから始まったと言う。神具類は、神社で保管している。

【意義】

- ① ほげどんは、八坂神社の大祭であるので祇園祭ともされるが、ここでは鹿児島の秋祭り「ほげ」の一つと捉えるべきである。
- ② この祭りは、シベ行列に象徴され京都八坂神社祇園祭の御霊信仰につながる無病息災を願う意味とともに、海運業・商家の商売繁盛、鯉船の船主・漁師たちの豊漁祈願と言った、複合的な意味を持った祭礼と言える。
- ③ 伝承や先学の研究を踏まえれば、この祭礼の神幸行列が、十二冠女を特徴とした今の姿になったのは、近代に入ってからだと考えられる。
- ④ 十二冠女の習俗は、鹿児島市の「おぎおんさあ」でも見られるが、坊津で伝承されていることは興味深い。坊津は頭上運搬が盛んであった地域であり、その点から伝播の新旧を考える必要がある。

【参考文献】

- ・編纂委員会編 一九六九 『坊津町郷土誌』上巻・下巻 坊津町
- ・坊津史談会 一九八四 「昭和五九年一〇月一九日坊津史談会例会資料」

(井上 賢二)

45

妙円寺詣り
みょうえんじまい

- 〔別 名〕 妙円寺詣りフェスタ
- 〔伝 承 地〕 日置市伊集院町
- 〔実施時期〕 一〇月二二日、二三日
- 〔実施場所〕 伊集院町徳重神社
- 〔伝承組織〕 日置市観光協会・商工会

〔名称〕

藩政時代、鹿児島城下の侍たちは、関ヶ原合戦の夜に往復四〇キロメートルの道のりを胃に身を固め義弘公の菩提寺である伊集院妙円寺まで参拝していた。これを「妙円寺詣り」と言っていた。妙円寺は、明治二年に廃仏毀釈により壊され、その跡に徳重神社が建立された（妙円寺は明治一三年に、近くに再建されている）。妙円寺詣りはこの徳重神社に参詣する事を言う。

現在は、日置市・商工会・観光協会等主催の「妙円寺詣り」及び「妙円寺詣りフェスタ」と名付けられて、武者行列参拝、郷土芸能奉納、相撲・武道大会、ウオークラリー等の「妙円寺詣り奉納行事」が行われている。

〔実施場所〕

日置市伊集院町徳重神社。鹿児島照国神社から伊集院までのウオークラリーも開催されている。

〔実施時期〕

関ヶ原の合戦に合わせて旧暦九月一四日の夜を徹して行われていたが、平成五年から毎年一〇月第四土・日曜日に実施されている。



徳重神社周辺



妙円寺詣りの様子

「由来・伝承」

関ヶ原役での島津義弘の敵中突破や、その後の三日三晩に渡る退却の苦難を偲び、さらに泰平の世に士気を高め、併せて心身鍛錬を図るため、いつの頃からか、鹿児島城下士たちが、関ヶ原の前夜にあたる旧暦九月一四日夜に、鹿児島から義弘の菩提寺伊集院妙円寺まで往復四〇キロメートルの道のりを鎧冑に身を固めて参拝していた。城下士たちは、妙円寺に参拝し、夜の明ける前に城下に帰還し、翌日は平素と変わらぬ態度で仕事をしていたと言う。これを「妙円寺詣り」と言っていた。

妙円寺詣りの起源ははっきりしないが、その起源にまつわる次のような話がある。

鹿児島城下の若侍たちは、毎年関ヶ原合戦に参加した武士たちに、敵中突破の話を聞き士気高揚に努めていた。しかし次第に関ヶ原従軍者も死去して聞けなくなってきた。城下では話が聞けなくなってきたので、出水方面の押さえとして勤めていた出水の中馬大蔵を訪ねて話を聞こうと出水の中馬家まで訪ねて行った。庭にいた中馬に、若侍たちが来意を伝えると、中馬は喜び若侍たちを招き入れた。中馬は衣服を袴に改め床柱の前に正座して、若侍たちに向って「関ヶ原は」と言ったとき、涙を流し後の言葉が出ずに終わったという。若侍たちは今日の話が今までで最高であったと感激して帰ったと言う。

このように、関ヶ原の敵中突破の苦難や義弘公の悲憤に思いをはせるといふ風潮の中から、妙円寺詣りが発生してきたであろうことは推測できる。

「その後の展開」

明治時代になると、郷中教育の流れを受けた鹿児島の学舎が、妙円寺詣りを実施し、舎の青少年が参加するようになっていく。

鹿児島市内の学舎の青年は、一四日の夕刻、鎧兜に身を固め、少年は陣羽織をつけ、法螺貝やラッパを先頭に、千石馬場、西田通り、

常盤を経て伊集院への旧街道を妙円寺へと遠行した。

薩摩では何事かをする時に「チエスト行け」とか「チエスト」と大声を張り上げて絶叫することがある。これは、絶対絶命のピンチに立った時、関ヶ原の敵中突破の故事にならって奮起するための関の声である。伊集院までの真夜中の遠行に苦しみを体験するとき、青少年たちは、義弘公の悲憤苦難を追体験化したような気分となり「チエスト関ヶ原」を絶叫にした。

青少年たちは、遠行に疲れると「チエスト行け」と絶叫し、義弘公の苦難を偲び「妙円寺詣りの歌」を歌い、自身を奮起させながら往復四〇キロメートルの長い道のりを歩いた。

「妙円寺詣りの歌」

（大正四年、池上真澄作詞、佐藤茂助作曲、二二節まである）

一明くれば閉ざす雲暗く

すすきかるかやそよがせて

嵐はさつと吹き渡り

万馬いなく声高し（以下省略）

戦後しばらくは、軍国主義色彩があるといわれ、甲冑や刀剣が不足するなどのこともあって細々と行われていた。昭和二六年に伊集院町で、「妙円寺詣り武者行列」が復活すると、町主催の「妙円寺詣り大会」となり、武道競技大会やステージイベント等と併せて行われるようになった。妙円寺詣りは、大会形式となり新しい形で復活再生した。

「伊集院町の妙円寺詣り」

伊集院麓出身郷士の日記等には妙円寺詣りの記事は見られない。明治二〇年設立され大正初めに姿を消した伊集院の学舎「玉成館」にも妙円寺詣りは伝わっていない。藩政時代は、伊集院郷の郷中二才たちは、妙円寺詣りをしていなかったようである。

昭和三年には、伊集院麓の子弟が武者姿で隊列を組み参拝し、昭和四年頃から武者行列に町や農家の子弟も合同で参詣するようになったと言う。

戦後一時中断されていた武者行列は、復活の気運がおこり、学生会がそれを受け昭和二六年に復活実施した。その後商工会が後援するようにになり、武者行列保存会が結成された。伊集院町武者行列が復活実施されると、伊集院町郡学生同志会も武者行列隊を結成し、これを機に鹿児島学舎連合会、吉利共学舎、日置責善舎、永吉南郷会、美山少年隊も参拝するようになった。

〔実施内容〕

「第六六回、妙円寺詣りフェスタ」(平成二八年は、昭和二六年から数えて六六回目)

1 武者行列参拝

鎧冑に陣羽織姿に身をまとった一行が隊列を組み参拝する(少年隊は近隣の町から、学舎連合と伊集院妙円寺詣り武者行列隊は伊集院町内から隊列を組んで)。神前に到着すると、その団体の名が高々



写真2 武者行列参拝 美山少年隊



写真1 伊集院町妙円寺詣り武者行列保存会

と読み上げられ、代表者は神前で祝詞奏上を行う。

今年の参加団体は、伊集院町妙円寺詣り武者行列保存会、鹿児島市学舎連合会、美山少年隊、日置積善社、吉利妙円寺詣り保存会、永吉南郷会、市来猶興舎であった。

一四日夜に妙円寺詣りは行われていたことになんで、鹿児島市学舎連合会の武者行列は、午後四時半に伊集院小学校前から隊列を組み出発し、時刻午後五時半に神社に到着、参拝する。伊集院武者行列保存会の一行は、午後五時半に向江町公民館前から出発し、町中を通り、午後六時半ごろ暗くなってから神社に到着、参拝する。

2 郷土芸能

参加団体は、大田太鼓踊り、下養母太鼓踊り、吉利中区太鼓踊り、伊作太鼓踊り、徳重太鼓踊り、薬丸野太刀自顕流。

3 武道大会

弓道大会(徳重神社弓道場)、相撲大会(徳重神社土俵)、空手道大会(伊集院総合体育館)、剣道大会(伊集院総合体育館)、柔道大会(伊集院小学校)、銃剣道大会(伊集院武道館)、ゲートボール競技大会(ふれあい健康センター)で実施。

4 ステージ部門

妙円寺詣りの歌暗唱披露、薩摩日置鉄砲隊披露、伊集院高校ダンス部、鹿児島実業吹奏楽部など多数で、鹿児島市をはじめ、県内各地の学校などの団体も年々増えつつある。

5 ウォークラリー

旧暦九月一四日の夜に、甲冑をつ



写真3 弓道大会

けて鹿児島から妙円寺まで行き、翌日未明までに往復帰宅するのが元の妙円寺詣りであったが、昼間のウォークラリーが現在の妙円寺詣りのメインとなっている。

二日目の日曜日午前七時に、鹿児島照国神社で受付をして、途中水上坂・横井・土橋など数か所で検印を貰い徳重神社まで約二キロメートルを歩く。途中に検印テントが設けられ、お茶等の接待が行われる。平成二八年度はあいにくの大雨で小学生の団体は中止となった。それでも大人約三五〇人が鹿児島から伊集院まで歩き通した。

【意義】

関ヶ原の戦いは、慶長五（一六〇〇）年の出来事であるから既に四二九年の歳月を経過している。それほどの長い期間、負け戦の無念さを語り伝え、行事として生かしてきたのが鹿児島の「妙円寺詣り」である。戦勝の記念ならいざ知らず、敗戦を記念してこれほどの行事を残し、しかも、現代ではそれを青少年健全育成や、町興し策として生かしている所は鹿児島において他にはないのでなかろうか。

かつては、主君に対しての忠義従心を鼓舞するための「往復四〇キロ



写真5 妙円寺詣り，ウォークラリー



写真4 雨の中の妙円寺詣り

メートルの行軍」であったかもしれないが、その行軍を、「山坂達者」というスローガンに変えて「青少年の足腰の鍛錬」という意義づけをして「妙円寺詣り」を再興している。そこには尚武を貴ぶ薩摩の独特の歴史観が窺えるのである。行事の価値観は、時代とともに変遷していくのであろうが、妙円寺詣りは、地域の持つ独特の価値観をうまく取り込んで意義付け、今日も隆盛をみている好事例であろう。

「参考文献」

- ・鹿児島県立図書館 一九六九 『薩摩の郷中教育』
- ・山下正盛 二〇〇二 『名武将島津義弘と伊集院』

（出村 卓三）

46

鹿籠の太鼓踊り (ほぜ祭り)

別名 ほぜ祭り

伝承地 枕崎市西鹿籠・東鹿籠地区

実施時期 毎年一〇月二八日・二九日

実施場所 南方神社・天御中主神社

伝承組織 山下・水流太鼓踊り保存会

東鹿籠太鼓踊り保存会

【名称】

鹿籠地区の秋祭り「ほぜ祭り」で神社に奉納され、地区内を披露して回る太鼓踊り。踊りには西鹿籠・東鹿籠の二組がある。西鹿籠太鼓踊りは、踊り子を出せる集落の減少で、現在は二集落の「山下・水流太鼓踊り」として活動している。「東鹿籠太鼓踊り」は、籠原・瀬戸口・中村・下園の四集落の踊り子で構成されている。

【実施場所】

二踊りとも、一〇月二八日は西鹿籠の南方神社で奉納して地区内を回り、翌二九日は東鹿籠の天御中主神社（妙見神社）で奉納、地区内披露となる。南方神社では地元西鹿籠太鼓踊りが先に踊り、一方、天御中主神社では東鹿籠太鼓踊りが最初に奉納される。

【実施時期】

十月二八日（元は旧暦九月一八日）・二九日の両日



枕崎市西鹿籠地区・東鹿籠地区周辺



写真1 東鹿籠太鼓踊り
鉦の後ろがシンボオドリ



写真2 西鹿籠太鼓踊り
ナカオドリの踊り子

〔伝承組織〕

西鹿竈の太鼓踊りは、南方郷の郷社南方神社に奉納してきた。町村制施行前には、西鹿竈地区各集落だけでなく、同じ南方郷に属した坊津（現在南さつま市）からも踊り子が出された。太鼓の皮の裏に「草野二才中」（草野は坊津の集落名）と記されている太鼓が保管されている。その後、町村制施行で西南方村（のち坊津町）となったため、坊津からは参加しなくなったと言つ。

明治末期頃は、山下、水流、通山、牧園の各地区が参加していた。戦時中は中断し、昭和二四年の市政祝賀に参加したのを契機に、山下・水流二集落の踊り子で復活。その後昭和二九年に山下公民館単独となったが、踊り子不足で昭和四一年に再び中断した。昭和五五年、若者の帰郷で青年が増加し、昭和五七年に一六年ぶりに復活した。昭和六二年には水流公民館との合同が実現し、「山下・水流太鼓踊り保存会」として活動している。

「東鹿竈太鼓踊り保存会」は、竈原・瀬戸口・中村・下園の四集落で構成している。戦前までは小園集落も入っていた。戦中に中断し、昭和二五年ごろ一集落だけで復活。しかし、昭和三〇年代後半に再び中断。昭和四八年に復活した後、現在まで続いている。

〔由来伝承〕

島津義弘が、兵を鼓舞するため踊らせたものだと言われている。ややテンポが速く躍動的な東鹿竈の踊りが出陣の踊り、ややゆったりと荘厳な西鹿竈の踊りが凱旋の踊りと伝わる。

また、次のようにも伝わる。「当時の鹿竈領主喜入忠統は、太守の命によりこの踊りを諏訪神社（南方神社）に奉納し、以後、毎年例祭日に奉納。例祭日と豊祭が同じ日であったため、今では豊祭の踊りとされている。」『鹿児島県の民俗芸能』一五八頁

〔実施内容〕

1 ほぜ祭り

鹿児島では秋祭りをホゼと呼ぶ。下野敏見氏によれば、①方限（薩摩藩の集落単位）の祭りとしての方祭説、②豊年祭りの豊祭説、③放生会説があるが、県内の八幡神社との関係から考えると放生会説が正しいとする『鹿児島大百科事典「ホゼ祭り」の項」。

一〇月二八日の南方神社例大祭は「ほぜ祭り」と通称し、実見した平成二八年は、午前一〇時から拝殿で神事、「巫女舞」として浦安の舞を奉納。浦安の舞は氏子の小中学生が踊る。午前一一時半からは、隣接する護国神社で秋季大祭の神事・浦安の舞奉納があった。午後一時から南方神社境内で、奉納芸能として西鹿竈太鼓踊り（山下・水流太鼓踊り）、山口棒踊り、東鹿竈太鼓踊りがある。

翌一〇月二九日の妙見神社でも午後から神事のあと奉納芸能があり、こちらでは地元の東鹿竈太鼓踊りを先に、次に山口棒踊り、最後に西鹿竈太鼓踊りの順になる。

2 西鹿竈太鼓踊り（山下・水流太鼓踊り）

世話役のもと、鉦一人・入れ鼓一人・「踊り手」と呼ばれる太鼓二〇人ほどで構成される。平成二八年の「踊り手」は一六人。鉦は二三歳から一五歳、入れ鼓は鉦より二、三歳年下の少年が踊る。「踊り手」はかつてナカオドリと呼ばれ、青年が踊った。現在はベテランも多い。また西鹿竈ではヒラオドリと呼ばれる踊り子もあつたが、現在は廃止されている。道中での先導役であつた。当時は、鉦・入り鼓からナカオドリ、ヒラオドリへの年齢階梯制が見られたと言つ。

カネ・入れ鼓は、鯉の滝登りの模様の木綿の着物に花笠姿。白足袋に麻裏草履を履く。笠の上には蛇の目状の花飾りが三方向に向けて付けてある。あたかも頭上に目があるように見える。カネは右手に鉦を、左手に檀木（「シモツ」と呼ぶT字型の杵）を持つ。入り鼓は首から胸の下に垂直に吊り下げた小太鼓を、両手に持った杵（「べ」と呼ぶ）で叩く。

鉦は数個あり、実測したものは、直径一八センチメートル、厚み五センチメー

トル。昭和五十八年など寄贈の年号がある。鉦の撞木は、長さ二五センチメートル、幅一九センチメートル、厚さ二センチメートル。打つ部分はカシの木・柄はスギで作つてある。予備に二〇本ほど準備しており、ちびてきたら、踊りの途中でも、取り換える。入れ鼓の鼓は幅二四センチメートル、直径二四センチメートル。胴の直径は一五センチメートル。一〇か所で締めている。鼓の桴は長さ二・八センチメートル、直径〇・八センチメートル、クワの木製。鉦・入れ鼓の花笠は、シベ（下部）の長さ三六センチメートル（顔の前の部分は短く長さ二二センチメートル）、花（上部）の長さ三六センチメートル、直径三三センチメートル。

踊り手（ナカオドリ）は、白かすりの浴衣に、カビモン（被り物）という朱色の布（モス）を頭からかぶつて背中まで垂らす。顔の前には縦に長い長方形の紗の布（ベール）を掛けて、顔を隠す。顔を隠すのは神社で奉納する時のみで、地区内各地での披露では被らない。黒帯を締め、白地の手ぬぐいを垂らしている。手ぬぐいには丸に鳥居の意匠があり、下に「太鼓踊」とある。鳥居は「西」を表しているのだろうか。黒足袋にわら草履を履く。浴衣に矢旗は背負わず、太鼓は肩から腹の前に垂直に吊り下げ、両手に持った桴（べ）と呼ぶで打つ。

太太鼓は、直径四八センチメートル、厚さ二七センチメートル。太太鼓の桴は、長さ一九センチメートル、直径三センチメートル。タラの木製。

踊りの隊形はカネ・入れ鼓を取り囲むように踊り手（ナカオドリ）が円陣を組む。踊り手が踊りながら歌う。行列時は、正面から向かつて左側に鉦・入れ鼓・踊り手、右側は全員踊り手の、二列縦隊になつて行進する。円陣になる時は、鉦・入れ鼓が中央に進み、踊り手が右回りに円を作る。頭上や腰の後ろで桴をカチンと叩くのが粋である。

南方神社での歌には、次の三つがある。曲調は粋なものゆつたりしていて、踊り全体が盆踊りのように感じられる。

○ヨツベ（四つ桴） 踊りの歌詞

「熊谷次郎直実殿は敦盛殿を打ちふせた。敦盛殿は組み伏せられて世に苦しげの息をつく」

○スイベ（摺り桴） 踊りの歌詞

「ヘゴ（肥後？）の高城のニホノ松、ヘゴになびかぬニホノ松。音に聞こえし高砂の、松に映ゆるは常盤山」

○ヒツ（引き） 踊りの歌詞

「川の瀬にそう鮎をとる。イーエ、イーエ、イーエ、イーエ、サーラサーラアと鮎をとる」

また、妙見神社の奉納では次の歌が引き踊りの前にある。

○ヒトツベ（二つ桴） 踊りの歌詞

「淀の川瀬の水車、誰を待つやらくるくると。前は石川濁こされた、人がにこそばぜひもない」

平成二八年は、練習を三週間行い、ほぜ祭りを迎えた。鉦・入れ鼓は桜山中学校一年と桜山小学校五年の兄弟で、三年目の踊りとなった。二八日は午前一一時に山下公民館に集合し、正午から公民館打ち込み、午後一時から南方神社へ奉納した。その後招魂塚打ち込み、病院・JA・市役所での披露、水流公民館打ち込みを経て、午後五時半から山下公民館で最後の打ち込みを行った。

翌二九日は午前二時半山下公民館集合、公民館打ち込みのあと、妙見神社で昼食をとり、東鹿竈・山口の踊りに続き、午後一時四十分から奉納踊りを行った。保育園での披露、小園・宇都公民館での打ち込みの後、午後五時に山下公民館に戻り最後の打ち込み、午後七時から打ち上げ（慰労会）となった。

3 東鹿竈太鼓踊り

東鹿竈太鼓踊りでは、鉦（一人）・入れ鼓（一人）・ナカオドリ（二〇人程度）のほか、西鹿竈にかつてあったヒラオドリに相当する「シンボオドリ（シンボオどり）」が残る。平成二八年に実見したシンボオドリは四人。

鉦・入れ鼓・ナカオドリの衣装・楽器は西鹿竈と同様だが、鉦・入り鼓の振袖が、西鹿竈では緑地、東鹿竈では青地になっている。また、ナカオドリが黒帯から下げる手ぬぐいが青地で、「東鹿竈太鼓踊」とある。帯からは紅色の巾着も垂らしている。

シンボオドリは、長袖のついた襦袢に、下はバッチというズボン下、黒の脚絆

にわら草履履き。帯は鶯色。太鼓の位置がナカオドリより高く、動きも躍動的。シンボオドリは道中・入場でナカオドリと異なり、大きく太鼓を左右に揺する。道中では先頭の鉦・入り鼓に続き隊列を組む(写真1)。ナカオドリはそのあとに続く。境内に到着すると、鉦・入り鼓が中央に入り、シンボオドリは左回りに、ナカオドリは右回りに円陣を作っていく。円陣ができると、シンボオドリは円陣から外れ、しゃがんで踊りを見守る。

歌には次のものがある。

○ヨズベ(四つ桴) 踊りの歌詞

一「敦盛どのはおいそそぐ、村はしとみ弓てんじ、真羽の矢そろへ十二すじ」
二「少年の年は一六歳、いくさはけさの始めなり、いくさはけさの始めなり」

○スイベ(摺り桴) 踊りの歌詞(南方神社で奉納)

一「今後の富士野の牧狩は、諸国大名の馬ぞろえ」
二「曾我のぜ五郎のある兄弟は、親の仇をこころぎす」

○ヒトツベ(二つ桴) 踊りの歌(妙見神社で奉納)

一「しようめんへよせて、松に雀が巢をかけた、さこい雀の住みよかる」
二「音に聞えし高砂の、松の映ゆるはときや山」

○ヒツ(引き) 踊りの歌詞(十五夜綱引きの歌)

一「あたご参りでソウリハそうでも引かれた、アサそうれもあたごのソウリハソウ、でもそうかなおもしろやサーッサ」

東鹿竈太鼓踊りも、神社での奉納のあと、事業所や病院・介護施設を慰問して披露する。

【意義】

① 中入りが鉦一人・入れ鼓一人で構成されている。この構成は南薩地区では、鹿竈地区と南さつま市坊津町久志でのみ見られる。

② 歌は大太鼓のナカオドリが踊りながら歌う。鉦の音と歌声とが重厚に響き、荘厳さがより強調された、念仏踊り系の太鼓踊りと言える。したがって、「ほぜ祭り」の奉納芸能としての豊作感謝の踊りであるとともに、先人の供養

あるいは遺徳をしのぶという要素が強い踊りと考えられる。

③ 東鹿竈にはシンボオドリと呼ばれる先払いが残る。西鹿竈でも同様のヒラオドリがあつたが、現在はない。先払いがあるものには、南九州市川辺町勝目の上山田太鼓踊り・中山田太鼓踊りにワラフリと呼ばれる踊り子がある。こちらは太鼓を持たず、ササラ状の採り物を両手に持つて大太鼓の楽に合わせ盛んに振る。

④ 南さつま市津貫での事例をはじめ、大太鼓の踊り子を「ヒラ」と呼ぶ地区が南薩には多い。東西鹿竈ではこれをナカオドリと呼んでいるが、それに相当するのが他地区では「ヒラ」となっている。

⑤ 小野重朗が指摘する「ヒラオドリ」↓「ナカオドリ」↓「世話役」という流れを他地区の名称と比較すると、他地区では「ヒラ」↓「世話役」である。かつて鉦入れ鼓・先払い・大太鼓の三重構造であつたものが、鉦入れ鼓・大太鼓の二重構造になったと考えれば、西鹿竈でヒラオドリがなくなりナカオドリだけになったのと、名称の逆転はあるものの、同じ現象と理解することができる。すると勝目の例は、その先払いが大太鼓に吸収される移行期とも位置づけられる。

【参考文献】

- ・鹿児島県教育庁文化財課編 一九九二 『鹿児島県の民俗芸能―民俗芸能緊急報告書』 鹿児島県教育委員会
- ・下野敏見執筆担当 一九八一 「ホゼ祭り」『鹿児島大百科事典』 南日本新聞社
- ・小野重朗 一九六三 「西鹿竈太鼓踊り」『鹿児島県文化財調査報告書第十集』 所収、一九九三 『南日本の民俗文化Ⅳ 祭りと芸能』 第一書房 再収
- ・小野重朗 一九九二 「枕崎市東鹿竈太鼓踊り」(鹿児島県教育庁文化財課編『鹿児島の民俗芸能―民俗芸能緊急報告書』 鹿児島県教育委員会)

(井上 賢二)



写真6 山口棒踊り



写真3 天御中主神社 (妙見神社)



写真7 南方神社



写真4 東鹿籠ナカオドリのバチ



写真8 山下公民館での打ち込み



写真5 東鹿籠の鉦・入れ鼓



写真10 南方神社での巫女舞（浦安の舞）



写真9 南方神社へ着いた西鹿籠の踊り子

47

やごろう まつ
弥五郎どん祭り

〔別 名〕 八幡神社浜下り

〔伝 承 地〕 曾於市岩川八幡神社

〔実施時期〕 一月三日

〔実施場所〕 曾於市岩川町内

〔伝承組織〕 曾於市商工会

〔名称〕

曾於市岩川の八幡神社の一月三日の例祭に「弥五郎どん」と呼ばれる大型偶人像が巡行するので、この祭りの名称となっている。南九州の神社では、秋の収穫感謝祭（ホゼ祭りと言う。）の頃に、神社の御神体が社殿から出て海岸まで巡行する祭礼があり、これを「浜下り」と称している。浜辺がない所ではこれを「浜殿下り」と称する所もある。「弥五郎どん祭り」は、弥五郎どんが「浜下り」の先導役となって巡行するので、「八幡神社浜下り」とか「弥五郎どん浜下り」とも呼ばれている。

〔実施場所〕

曾於市商工会青年部によって組み立てられた弥五郎どんは、一月三日に岩川の市街地を巡行して、また神社に帰って来る。三日の神幸行列（浜下り）当日は市街地には露天商が立ち並び、毎年一〇万人以上の人々の参列で終日賑わう。弥五郎どん祭りは鹿児島県の三大祭の一つと言われている。

〔実施時期〕

岩川八幡神社の本祭は一月五日であったが、昭和五四年から一月三日の文化の日に合わせて「弥五郎どん浜下り」の神幸行列を行う。



岩川八幡神社周辺



弥五郎どんの巡行（浜下り）

ようになった

四日は中休みで、五日は「八幡神社秋季例祭」といい、弥五郎どん像は五日まで境内に立てて置かれる。五日の秋季例祭は以前に行っていた収穫感謝祭（ホゼ祭り）を引き継ぐもので、弥五郎どんの解体終了後に神社関係者や商工会青年部参加の直会が行われ、「弥五郎どん祭り」はこれをもって終了となる。

「実施内容」

1 触れ太鼓・起こし太鼓

三日午前一時、商工会青年部の全員が揃うと祭りの安全祈願神事が行われる。

神事が済むと、社殿で打つ太鼓に送り出されて、青年三人ずつが二組に別れ（二人が太鼓を担い、一人が打つ）、『弥五郎どんが起きっどー』と、叫びながら岩川の町を触れ太鼓という。町の人々は、この起こし太鼓を聞いて神社に集まり出す。午前一時、触れ太鼓の出発に合せて火花が上がる。

2 弥五郎どん組み立て

起こし太鼓の青年達が戻ってくると午前二時ごろから拝殿の中で弥五郎どんの組み立てが始まる。

弥五郎どんの本体と着物は、閏年の四年毎に作り替える。本体は、竹編みである。編み方は、網目が六角形になる六目網のやり方で、竹籠状に編み、内部は、縦に二本横三本の鉄骨が通つ



写真1 触れ太鼓

ている。竹籠部はこれまでバラ編み専門家を作っていたが、高齢のために辞退したので、技術保存を図るために、本年（平成二八年）から地元青年部が九月二九日から実質一七日かかって胴体製作まで完成させた。

この本体に梅染めの着物（上着と袴）を着せる。着物と袴に使う生地は二五反。着物の身丈は、三・一メートル。両手を広げた状態で、左右の袖口から袖口までは一二メートルある。

衣裳を縫う役目は、大正三年までは元八幡神社のあった縫菌方限（吉井集落付近）と決まっていた。大正三年に神社が現在地に移転したので、神社近くの上馬場集落と東馬場集落の婦人たちが上着と袴の裁縫を交互に担っていた。今年（平成二八年）は、大隅地区民生委員の婦人たち一四人が、生地の裁断、縫製、アイロンがけなど一日三時間ずつ八日かかって完成させた。

弥五郎どん組み立ては、商工会青年部のリーダーのもとに行われる。腕の部分は数本の竹を曲げて胸の位置で組み合わせるのでもっとも手間取る作業となる。中に通した鉄骨と胴体を針金で結び付け固定し、上半身の着付けが終わると弥五郎どんの面を付ける。弥五郎どんの面は二面あって、一面は巡行用の面、もう一面は御神体化された面である。この面は社殿の奥にしまわれている。胴体の組み立てが終わり、着物が着せられると、巡行用の面を神官と手伝いの青年二人が神殿の奥からうやうや



写真2 社殿の中で組み立て

しく奉持して来る。青年達が手伝い面を付ける。面を付ける部分の頭には白い布が幾重にも巻かれている。面が固定されると頭に飾りの山鳥の羽根（鳳凰の冠とも言う。）を付ける。

面に神性は宿っているのであろうか、面を付けると組み立て作業の青年達に緊張感が生まれる。

ここまでの作業は拝殿の中で行われる。拝殿の出入口は、縦二・〇五メートル、横二・六八メートルしかないので、弥五郎どんを拝殿から外に出すのは相当手間取る。

広い外で組み立て作業をせずに、出入口の狭い社殿の中で組み立てることに意義があると関係者は語る。狭い社殿の中で、しかも丑三つ時の真夜中に作業を行うことは、秘密性を持たせることにより、弥五郎どんを神格化する仕掛けであろう。

弥五郎どんは『竹籠でできている。』と言うと腹痛になるという。弥五郎どん起こしに参加すると、その一年間は病息災になり綱を引く子どもたちは健康となる、また、弥五郎どんの着物のお下がりで子ども服を作ると子どもの身を守るなどと言われ、弥五郎どんは神性



写真4 弥五郎どん起こし②



写真3 弥五郎どん起こし①

化されている。

3 弥五郎どん起こし

午前四時。青年達が弥五郎どんを台車に乗せ終ると、集まった人たちが「弥五郎どんが起きつどー」の合図で、胸元から伸びた綱を一齐に引き起こす。後ろから支え棒で押し上げ、前から引つ張られて弥五郎どんは起きあがる。これを「弥五郎どん起こし」という。この起こし綱を引くと、一年間無病息災となるといふ。

弥五郎どん起こしの儀礼が終ると東側に移動させる。そこで、午前七時頃まで、袴、帯等の着付けや、木製の矛、印籠、刀等を取り付け、奉納された傘、下駄、草鞋等を飾る。こうして身の丈四・八メートルの弥五郎どんは、午後一時の浜下りまでここに立てて置く。

4 浜下り

弥五郎どん巡行を「浜下り」とも言う。午後一時、花火を合図に「浜下り」が始まる。弥五郎太鼓隊、大傘、神杵、猿田彦、意義もん（弓、矢、幟）、を持つ宮たち衆、神輿、小学五年生が引く弥五郎どん、稚児行列と続く。地元青年で結成された「弥五郎どん太鼓」が笛、鉦、太鼓を響かせ巡行を盛り上げる。弥五郎どんの肩には、竹棒を持った青年が一人乗っている。これは途中の電線等を避けるためである。



写真5 5日まで境内に立つ弥五郎どん

威風堂々と行進する弥五郎どんを見物しようと一〇万人以上の人たちが祭りの町（曾於市岩川町民は四三〇〇人）に集う。沿道には市が立ち、各種の食べ物、竹製品、農具等の露店が並び、身動きが取れなくなるほどの賑いとなる。

弥五郎どん祭りは、鹿兒島三大祭りの一つとも称されている（鹿兒島三大祭は、おはら祭り、初午祭、弥五郎どん祭りを言うが、志布志お釈迦祭りを入れることもあり、明確ではない。）。

経路は、神社鳥居を出て右折して大隅中学校前を通り、国道に出て右折し、バイパス高架線下を通過する時（斜めに屈んで通過する姿を見ようと見物人が多く集まる。）が今は最大の見せ場となっている。高架線下を通過し、役場前、中央公民館、国の合同庁舎前、鹿兒島交通駐車場で折り返す。

中央公民館前で神輿と威儀もん達は、行列から離れ、中央公民館の中庭に移動する。ここを「お旅所」とし、休憩が済むと、神輿の前で祝詞を上げ、巫女舞を行う。弥五郎どん一行が折り返して国の合同庁舎前に来て休憩をするのに合わせて、神輿たちは再度行列に加わり神社まで巡行する。帰りは、岩川小学校前を通過して神社に午後三時頃帰着する。



写真7 巡行する弥五郎どん



写真6 先頭は威儀物を持つ宮たち衆

小学校の校庭では武道大会（剣道、柔道、空手、相撲など）が開催されている。

神社に帰って来た弥五郎どんは、立てたままにして置き、五日午後三時頃に解体され、胴体、刀、矛、台車などは収蔵庫に、衣装は社務所、お面は神殿に納められる。

「由来・伝承」

弥五郎どんは、身の丈四・八メートルもの巨大神であるところから、その巨体と御霊信仰が結びつき、①隼人族の首領である大人弥五郎という説（弥五郎どん祭りは、大和朝廷軍に殺された隼人族の首領弥五郎どんの御霊が世間に祟るようになったので、その霊を鎮める為に祀るようになったと言

う。②八幡神社の祭神である神功皇后や応神天皇に仕えたという伝説上の武将、武内宿祢説（岩川八幡神社はこの説をとっており、武内宿祢を祭神として祀っている。弥五郎どんは武内宿祢だから矛を持ち、刀を差していると言う。）。③浜下り行列を先導するから、先導する神の「猿田彦神」であるという説などがある。

ホゼと浜下り

南九州では、神社の御神体が神殿から出て、神輿に担がれて領域内を巡行することを「浜下り」とか「浜殿下り」と称している。浜下りは、秋の豊年祭と関連が深い。

秋の収穫感謝祭・豊年祭のことを鹿兒島ではホゼと称し、豊祭ま



写真8 陸橋下を通過する弥五郎どん

たは豊穰祭と書く。地域の神社で祭典が催される。ホゼ祭りに先立ち神社の神様が浜下りをして、村を清めて回るといふ伝承がある。「弥五郎どんの浜下り」は、ホゼ祭りを迎えるにあたって、領域内を祓い清めて回る儀礼とも言われている。

岩川八幡神社のホゼは、旧暦一〇月五日であったが、後に月遅れの十一月五日、六日（六日は後祭り）となり、さらに十一月三、四、五の三日間に変化した。弥五郎どんの浜下りは十一月五日だったが、十一月三日の祝日（文化の日）が都合が良いということで、昭和五四年から十一月三日に改められた。

岩川八幡神社のホゼ祭りは、十一月三日の浜下り、四日の中日、五日が秋季例祭を言う。本来は、浜下りを含めた三日間の行事であるが、今では十一月三日の「弥五郎どんの浜下り」だけが強調された祭りとなっている。

ホゼは収穫感謝祭だから、各家庭でもご馳走を作り親戚縁者や知人を招いて祝宴をした。ホゼの料理献立は決まっており、手作りコンニャクの刺身、甘酒、マンカンメシ（赤飯）、オヒラ（干し魚の焼いたのを入れた煮しめ）などを作った。元は一月五日がホゼで、翌日の六日が小学校の運動会と決まっていたのでホゼ料理の残りが運動会のお弁当になっていたという。

弥五郎どんの面

胴体と衣裳は、四年毎に作り替えられるが、弥五郎どんの面は御神体となって神殿に納められている。神は面に宿っているのである。神殿には巡行用の面と、御神体の面の二つが収められている。巡



写真 9 巡行用の弥五郎面

行用の面は、明治三八年に日露戦争勝利を記念して、京都で作らせたものだと言う。御神体の面は、創作年代は不明である。大正四年に修復されたようだが、傷みが激しくなっていたので、六〇年後の昭和五二年に、岩川八幡神社奉賛会から依頼を受けて、泉木工所の職員が修復し塗り直した。

彼は「剥落がひどく胡粉を全部剥がしたら樟材にしみ込んだ墨書きの髭あとなどが出てきた。少し削ると微かに樟材の香りがした。木彫りの痕を見ると技量のある人の作ではなく素人の作品だと思った。面は塗り直すことにし、下地は砥の粉と水性ポンドを混ぜ塗装。眉、顎髭、鼻髭などは墨で描き、口と目の周りは赤色、眼球は金色を塗り、完了して納めた。」と語る。

「考察」

巨人弥五郎どんは、南九州にだけ見られる偶人像である。

南九州は竹の生産地であり、巨大な竹人形を作り上げる技術があったことが、巨大人形を生み出した背景にあるのであろう。

巨人弥五郎どんは、ここ岩川八幡神社の「弥五郎どん」の他に、宮崎県日南市飢肥の田ノ上八幡神社の「弥五郎さん」、宮崎県都城市山之口町の野八幡神社の「弥五



写真 11 修復後の弥五郎面（神面）



写真 10 弥五郎古面 S52 年撮影

郎どん」が知られており、山之口の弥五郎どんが長男で、次男が岩川、三男が飢肥であるなどと言われているが、その理由は明らかでない。神社創建年代の古い順に由来するのかもしれない。

弥五郎どんは身の丈四・八メートルもある巨大偶人像であるところから、人々に強烈に印象づけられたであろう。おそらく強大神に対する住民の願望と御霊信仰が反映されて「隼人族の首領」説が生まれて来たのであろう。また日本神話の普及につれて伝説上の武将「武内宿祢」説が発生し、先導する神は猿田彦であるとの認識から、浜下りの先導神「猿田彦」説などが生まれて来たのであろう。

岩川八幡神社のホゼに弥五郎どんは巡行する。ホゼ祭りとの関連に着目する必要がある。収穫感謝祭であるホゼを迎えるにあたって、神社の神が領域内を清めて回る神事が行われていた。弥五郎どん巡行は、ホゼに先立ち領域内を清め払う神事活動であるとも考えられる。

秋のホゼと仮面神巡行が関連づけられている祭りは、湧水町吉松の箱崎八幡神社の「ウオードン祭り」、指宿市牧間神社の「浜下り」などがある。

吉松の「ウオードン祭り」は、一月二五日に行われるホゼの一週間前の一月一九日に、ウオードンと呼ばれる二つの神王面を奉持した神官たちが「ウオーウオー」と大声で叫びながら村中を回り、村境で神王面を立てて悪霊を追いだすという祭りである。この祭りはホゼの前に村里を清めて回る祭りであると伝承されている。

牧間神社では、一〇月一四日がホゼの前夜祭（神舞）、一五日がホゼ、一六日が浜下りである。浜下りには、面を被り偶人化した猿田彦が巡行する。

指宿市揖宿神社の「猿田彦浜下り」は、昭和二五年までは、神王面を竿先に括って巡行していたが、その後人がその神王面を被り巡行するようになり、その後に人形化し、リヤカーに乗せて引いていた時もある。今はその人形が大型化して台車に乗せて巡行している。この例は、神王面の巡行が偶人化し、さらに大型化していった過程

を示している。この揖宿神社の事例は、弥五郎どん巡行の成長過程を暗示しているようである。

県内には、名前は持たないが、他にも同じように大型偶人像が巡行する祭りがある。日置市日置八幡神社の「御田植祭」には、「大王殿（デオウドン）」と呼ばれる大型偶人像が出る。指宿市揖宿神社の「猿田彦」もそうである。今は行われていないが、新田神社文書に元徳三（一三三二）年に「猿田彦大神車引き神人二五人」と記載があり、新田神社でも二五人もの人たちが引く大型人形が中世に存在していた。

南九州では、神社の神が領域内を巡行し清めて回る時に、「神王面」を奉持して巡行する祭礼が今も各地に残っている。弥五郎どんの面が神王面だとするならば、弥五郎どんの検証には神王面巡行に着目する必要があるようだ。

【参考文献】

- ・真鍋隆彦 一九八九 「大隅町岩川八幡神社の弥五郎どん祭り」
- 『鹿児島県文化財調査報告書三五集』
- ・曾於市教育委員会 二〇一一 『大隅、岩川八幡神社の弥五郎どん祭り、調査報告書』

（出村 卓三）

亥の日の石突き

〔別 名〕なし

〔伝 承 地〕指宿市十二町片野田

〔実施時期〕一〇月下旬～一月上旬の日曜日

〔実施場所〕片野田公民館広場

〔伝承組織〕片野田公民館

〔名称〕

亥の子行事の一つで、「亥の日の石突き」と呼ぶ。亥の子突きとは言わない。

〔実施場所〕

現在は片野田公民館の庭で行う。

片野田集落は、旧国道を挟んで南側を「片平」、北側を「片野田」と言う。復活前は、片平と片野田それぞれでこの行事をしていた。片野田は氏神社の前で、片平は公民館東の三差路でしていた。

〔実施時期〕

日には以前は旧暦一〇月の第二亥の日で、現在はそれに近い日曜日に実施している。

〔伝承組織〕

片野田公民館の行事。

二〇一六年の小学生は二十八人。昔は子どもだけの行事だったと言う。戦後しばらくまではやっていたが、子どもが少なくなり、昭和三五年ごろから中断した。その後、今から三〇年ほど前、公民館行事として復活した。



片野田集落周辺

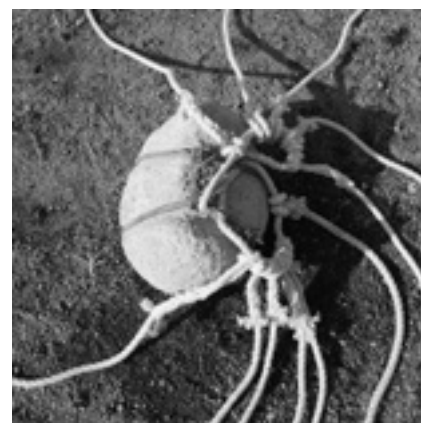


写真1 石突きの「石」



写真2 石突きの「土台」

「由来伝承」

「神様が山に帰る前に、豊作を感謝する行事」だと言われている。何の神様なのかは、分からないと言う。

また、石突きで、ネズミやモグラ、ミミズを追い出すためだともいう。

亥（猪）の多産にあやかり、無病息災、縁結び、子孫繁栄を願うとも言う。ミトモチ（夫婦餅）と言う言葉は、ここでは伝わっていない。

「実施内容」

1 道具・料理

当日使うのは、「石」と「台座」。「石」を実測すると、長さ三〇センチメートル、幅二三センチメートル、厚さ一六センチメートル、卵型の凝灰岩で、重さは一一・二キログラムあった。それに針金を巻き、そこにロープをつなげる。実見した二〇一六年はロープ一一本。長さ三五センチメートル。「台座」は、カンネンカズラ（クズ）を編んで作ったクッション状のもので、これにもロープがつなげてある。実測すると直径七〇センチメートル、厚さ五センチメートルであった。二〇一六年はロープを一四本つけてあった。

石は「今は公民館の倉庫にしまっているが、昔は三叉路の脇（三叉路南西側のキンチクの竹やぶ）に投げ入れていた。どこにやったかわからなくなっていたが、たまたま発見され、それを機会に石突きを復活させた。」と言う。

復活前は、午後六時〜七時頃、子どもたちが、各家から荒縄を一本ずつ持ってきて、それを付けて引き綱とした。三〇本ほどにもなったという。今は既成のロープをつけている。また荒縄をつける針金も、元は竹を割ったイデと呼ばれるものを使った。

台座を編むカンネンカズラは、昔は子ども組の「カシラ」（中学校一年生）を先頭に、子どもたちが山に取りに行っていた。

昔は、この日各家庭で豊作を感謝して、新米で餅をついていたが、今は家で搗く人はいなくなった。家を回って餅をもらうということは

しなかったという。

現在は公民館での石突きのあと、参加者全員で餅をいただく。準備は前日からもち米を研いで寝かせ、当日午前九時から公民館前の特設のかまどに火を入れ、甑を乗せて蒸す。

2 石突きの方法

もともとは、三叉路の中央に石を埋め、放射状に引き縄をつけた別の「石」を、歌を歌いながら綱を引くことにより上下させて、たたきつけた。現在は下になる石は公民館の庭にあらかじめ埋めておき、それを「石」で突く。

「台座」には子どもを乗せて、「石」突きと同じ要領で上下させる。下には藁が敷いてあり、これは道路でしていた頃も同様に敷いていたという。

3 「亥の日」の歌

イノーヒ モーツ ツカンター ダイカ
ウシトミチ ドンドン
カメズルガ ネドコイハ ドコジャロカイ
ヒガシマクラノ タナノシタ

コエガデントキヤ ウンマンクソナブレ
——亥の日の餅を搗かんのは誰だろうか
後ろの道にどんどん

カメズルが寝床は何処だろうか

東枕の棚の下

声が出ないときは馬の糞をなめよ

〔片野田公民館二〇〇一年一月一日作成資料より〕

「意義」

亥の子習俗は、「西日本の農村によく見られるもので、収穫儀礼と結びついた伝承が多い。」「日本民俗大辞典」と言われる。習俗自体は同様であるが、指宿地方では「亥の子」や「亥の子石」とは呼ばず、亥の日の石突きと称している。

また、亥の日の習俗として、薩摩半島西岸では、モーモードンやメモ、モチ引つ張れなどと呼ばれる習俗が見られる。南薩西岸では収穫後十一月の亥の日に、田んぼにモチの入った藁苞を立てて豊作を感謝する。また、牛の舌のような餅を、子どもがくわえて引つ張り合う。「モーモードンメモ、いっしゅま（一畝撒き）に一三俵」などと唱える。

白石昭臣は「日本の亥子の行事は、自然の運行をもとにした農事暦のうえに、中国からの暦の知識と俗信とが結びつき、展開されたものと考えられる。」「日本民俗大事典」としている。小野重朗は、正月のハラメウチ習俗と対比し、「秋の収穫が終わって石や棒で突き固めて土地を閉ざして農耕を終える行事があり、それ以後、人も土地も農耕を止めて静かな休止の生活に入り、新しい年を迎えてから、再び土を掘り起こして、新しい農耕生活を始めるというのが秋から春にかけての古い季節儀礼であり、生活であった。」と述べている（小野一九九六 八七ページ）。

亥の日の石突き行事は、かつて小野重朗が調査した時期には、指宿地方各地に見られたとされている（小野一九五六）。その後大半が途絶え、今回の基礎調査では、この片野田集落のほか、山川町後馬場集落から報告が上がっているのみである。南薩西岸のモーモードンも早期米が導入された地区では見られない。

今回調査した片野田集落では、豊作感謝の願いに加え、地域の絆を深める伝統行事として、改めて大切に継承しようとしている。

「参考文献」

・小野重朗 一九五六 「指宿地方の収穫祭」（一九九四『南日本の



写真3 由来を聞く子どもたち。手前は「土台」



写真4 亥の日の石突き

民俗文化Ⅴ 薩隅民俗誌』所収 第一書房
 ・小野重朗 一九九六 『南日本の民俗文化Ⅸ 増補農耕儀礼の研究』 第一書房
 ・福田アジオ他編 二〇〇〇 『日本民俗大辞典』 吉川弘文館

（井上 賢一）



写真6 浮き上がった「土台」の男子



写真5 公民館で搗きあがった亥の日の餅

49 うおーどん
大王殿（ウオードン）祭り

〔別 名〕なし

〔伝 承 地〕始良郡湧水町吉松箱崎八幡神社

〔実施時期〕十一月一九日

〔実施場所〕吉松地区

〔伝承組織〕箱崎八幡神社神官・鶴丸地区民
熊野神社役員

〔名 称〕

「大王殿祭り」と書いて「ウオードン祭り」と呼ぶ。この祭りは、大王殿（ウオードン）と呼ばれる男女一対の神面が、村中を清めて回る祭礼である。神面を奉持して村中を巡行して回る時に、悪霊退散のために「ウオー、ウオー」と大声で叫ぶ。大王殿（地域の領主、司祭者）が領内を巡幸し祓い清めて回る祭礼のようである。

〔実施場所〕

この祭りは、湧水町吉松箱崎八幡神社の祭礼で、神社を出た神官と神社役員一行は、吉松集落内を巡行し、村境北側の鶴丸地区（えびの市との境）と、南側の川添地区（栗野との境）で、注連縄を張り、道切りをし、領域内からの悪霊退散を行う。

〔実施時期〕

ホゼ祭り（十一月二五日）前の十一月一九日にこの祭りは行われる。鹿児島県内の「ホゼ祭り」と言うのは、収穫感謝祭である。家々で甘酒や蕎麦、コンニャクなどをこしらえ、神社では村中の人が参集し浜下りや芸能を演じる。



箱崎神社周辺



神官による巡行

「実施内容」

神社で祭典が済むと、午前一一時頃に巡行が始まる。箱崎八幡神社と書かれた旗を先頭に、宮司・神柴・神面を掲げた一行は、神社下の道まで降りて行く。そこに止めてあった軽トラックの荷台に、面のついた金剛杖を括り付け、ウォー、ウォーと叫びながら吉松町の中を通りぬけ、町の北側の鶴丸地区まで巡行する。現在は軽トラックに乗って巡行するが、戦前は馬に乗って巡幸していた、昭和四〇年代には自転車で巡幸していた時もあったという。

巡行はまず村の北側境の鶴丸地区を目指す。町境のえびの市に抜ける国道二六八号線には、すでに鶴丸地区民が、道の両側に、立てた竹竿に括りつけた注連縄を張り、道切りの準備をして待っている。注連縄には御幣が下げてある。国道沿いの両側の電柱に神柴（神）を立て掛け、さらに神面を括った金剛杖も立て掛ける。女面は右側に、男面を左側に立てる。準備が整うと、宮司が神柴と神面に向って祝詞をあげる。この祝詞には、悪疫、害虫、日照り等を村から退散させる主旨の言葉がもちこまれている。「道切り」をして村から



写真1 神殿から取り出される神面



写真2 ウォーウォーと叫びながら巡幸

外へ悪霊等を退散させるのだらう。その後、近くの鶴丸神社に移動し、鶴丸地区の人々と酒を交わして直会を行う。鶴丸神社の直会終了後、次に南側の吉松地区の川添を目指しまたウォー、ウォーと叫びながら、村の中を巡行する。

吉松地区南の栗野側の川添地区では、地区にある熊野神社の氏子や総代たちと、川添地区を四つに分けた各班の代表者一人ずつが、一行を迎える。

巡行隊が到着する前に、地区の人々によって既に村はずれの道路に竹を立てて注連縄が張られている。巡行してきた神柴・神面を道の両側に立て掛け、そこでも鶴丸地区で行ったように、悪霊払い等の祈祷を行う。その後は、またここでも地区の人たちと酒を酌み交わし直会をする。吉松には神社が九社あり、その中で箱崎八幡神社が格が一番高い神社だと言う。直会が終了すると、箱崎八幡神社の神職・氏子・総代たちは、神社に戻り、神面を神殿に納めて、祭りは終了となる。

・神面について



写真3 車を降り、神面を掲げ移動



写真4 村境で、祈祷（鶴丸地区）

箱崎八幡神社の神官は、祝詞に大王と書いてある所を「ウォーの命」と読む。祝詞には『ウォーの命の御分霊（わけみたま）これより下りして』と述べているくだりがある。依り代となる二つの面に神様（大王殿）が宿り、村里に降り巡行するのだと伝承されているそう。

男面は、黒漆塗で、わずかに胡粉が残っている。歯は黒く口唇に朱がみられる。能面の尉面に似る。しかし近世の能面の尉面にある頭頂の白髭、顎の植毛、眉間の縮み、頬の数本の皺、耳等が見られぬ事などから、製作年代は能面の完成期以前の室町中期まで遡るものと推測できる。表情は神秘的な愁いを漂わせており、やや品位の高い宿神的な容貌を持つ。

女面は、胡粉地に肌色を残し、口唇は朱、齒列は黒の彩色をした面である。若い女面であるが、眉がやや吊り上り、眼差しはきつく、柔和さとは程遠い神懸った表情の面である。近世の能面の女面のような広い額、高眉、真ん中からきちんと分けた髪型などが見られず、この女面も能面完成期以前の室町期の作であろう。この女面には、中世の面



写真5 鶴丸地区の直会



写真6 村境の祈禱（川添地区）

に見られる神性を示す小さな笑窪が両頬にある。

神が人の姿になって現れる際は、老人（翁）よくよかな老人・尉杖をついた怖い顔の瘦せた老人」と、若い女（巫女）になって出現するという説があるが、この「ウォードン」祭りの面は、我が国の仮面発生を考える際に、貴重な問題を提示してくれそうな面である。

「意義」

収穫感謝祭の「ホゼ祭り」とこの巡行祭は関連がある。ホゼ祭りの一週間前から村里を清めて回るといいうのがこの祭りの主目的だと言われている。

曾於市岩川の「弥五郎どん」も、「ホゼ祭り」の前日に村中を巡行して回る。弥五郎どんは巡行の先頭を闊歩するので「猿田彦神」とも言われているが、これは日本神話と結び付けられてから呼称が変化したのである。指宿市開聞町「枚聞神社」の秋の収穫祭「ホゼ祭り」に、「猿田彦」が巡行の先頭に歩く。日置市日置八幡神社は「大王どん（デオードン）」と呼ばれる大型偶人像が出る。現在は、六月第一日曜日の「御田植祭」に出現しているが、三国名勝



写真7 男面



写真8 女面

図会には秋の「放生会（ホゼ祭り）」に登場したと記載がある。このように「大王どん祭り（ウオードンマツリ）」や「弥五郎どん祭り」、日置市日置八幡神社の「デオードン」等は、「ホゼマツリ」に登場するという共通点が認められる。

このような神の依り代である「神王面」が領域内を巡行し、祓い清めて回る祭りは、錦江町池田旗山神社の「柴祭り」、鹿屋市七狩長田貫神社（田崎神社）の「鹿祭り」にも見られる。

この「ウオードン祭り」は、南九州に今も残る「仮面神（神王面）巡行」の古い祭りである。

「ウオードン祭り」や錦江町池田旗山神社の「柴祭り」などは神王面が巡行する祭りであるが、日置八幡神社の「大王殿（デオードン）」や岩川八幡神社の「弥五郎どん」等は神面が偶人化してさらに大型化した人形が巡行する祭りとなっている。これは、神の依り代である神王面が、さらに具体化して偶人像となり、大型化していったという変遷を窺わせる事例である。

指宿市揖宿神社の「浜下り」祭礼は、現在は猿田彦と呼ばれる大型人形が巡行し、「猿田彦巡行」と言われている。しかし昭和二五年迄は、棒の先に括りつけられた王面（神社に現存する巡行記録によれば、王面と記録されている。）の巡行であった。それが、近年次第に偶人化し、さらに大型化して現在的大型偶人像の「猿田彦巡行・猿田彦浜下り」となっていた。

薩摩川内市新田神社文書には、「一二四六（寛元四）年に新田宮の神官らが領内を神王面を掲げて年貢採否を行っていたところ、北方地頭鮫島家高が、神王面を破却したので大宰府に訴えられた。その結果鮫島氏は地頭を罷免」されたとある。また同文書には「大王面これ猿田彦面也」と書かれた記録も残っており、一二三三（元亨三）年に「神人二五人、猿田彦御車引き」との記載もある。

巡行の最中に発する「ウオー・ウオー」の掛け声は、村中から悪霊を追い払う為に発する言葉だという。このウオーという発声は、神社祭礼の警蹕でも使われている。大和朝廷に出仕した隼人族は、祭礼の時に狗声を発したと伝えられるが、「ウオードン祭り」のウオーウオーの叫び声は、隼人族の古習俗が想起できる。

また、南九州には、「大王神社」と称する神社はかなり存在している。例えば、大口宮人大王神社・菱刈大王神社・志布志市白鳥神社（元は大王の神を祀る）・帖佐寺師大王神社・熊本県人吉市江山田大王神社・錦町荒田大王神社・宮崎県西米良大王神社・須木村大王神社などである。

『三国名勝図会』には、曾於市投谷八幡・蒲生八幡・難守権現・霧島市大穴持神社・伊佐市湯尾八幡・霧島市横川安良神社などに末社として大王神社が認められる。湧水町吉松、鶴丸八幡神社の裏手には「大王神」と刻された石柱がある。

このうち祭神が知られるのは、熊本県人吉市江山田大王神社・錦町荒田大王神社で、この両社は相良氏以前の地頭であった平川氏を祀っている。宮崎県西米良大王神社は南北朝時代に落ち延びてきた懷良親王を祀る。投谷八幡は地主神を祀り、菱刈大王神社は大山津見命を祀っている。

薩摩川内市新田神社文書には「大王神は猿田彦で、蒙古襲来時に outbreak 奮戦した」と記述されている。

大王神とは何者か、事例が少なくその性格を想定するにはまだいささか無理があるが、敢えて述べると大王と呼ばれる神は、その地方の「王」的存在の地主神的性格を持つ神のようである。

この湧水町の「大王殿祭り」は、南九州の古代・中世社会を考察する様々な問題を今後に提起しそうな貴重な祭りである。

（出村 卓三）

50

湯之尾神社の神舞

- 〔別 名〕 湯之尾神舞 湯之尾豊祭
- 〔伝 承 地〕 伊佐市菱刈湯之尾
- 〔実施時期〕 新暦一月二三日
- 〔実施場所〕 湯之尾集落の湯之尾神社の境内
- 〔伝承組織〕 湯之尾神舞保存会

〔名称〕

「豊祭」が行事全体の名称で、そこで行われるのが神舞であるが、集落の人々には一体のものである。神舞は鹿児島方言で「かんめ」と発音される。他地域の神舞と区別するために「湯之尾神社神舞」と「湯之尾の神舞」の二つの名称があるが、前者が古く、後者は保存会ができてからの名称とされる。

〔実施場所〕

豊祭の一環として、午前中は人々が神輿をかついで集落を回る行事があるが、神舞は夜になって、湯之尾神社の境内に設けられた特設舞台で演じられる。

〔実施時期〕

現在は新暦の一二月二日に行われるが、旧暦十一月の一五夜、旧暦一月二九日に行われた時期がある。

なお、演目は、現在二六番継承されているが、三年に一度全曲が演じられ、ほかの年は一五曲ほどで済まされる。

〔伝承組織〕

一九七六年、湯之尾神舞保存会が結成され、この保存会が祭りの準備や上演の中心的存在である。



湯之尾集落



手力・戸隠・太神神楽

「由来・伝承」

神舞は、『古事記』、『日本書紀』にある天照大神が籠る天の岩戸の前で、天のうずめの命が踊ったのが起源とされるが、本神舞は、湯之尾神社創建時（一四九〇年頃）、五穀豊穰、無病息災を祈願し奉納されたと伝えられる。なお、昭和三十六年、火災にあい社殿とともに神舞道具等を失ったが、明治一〇〇周年を記念して昭和四三年に復活した経緯がある。

系統的には、日向神楽系の里神楽に属する。

「実施内容」

神輿等集落内の巡遊と参加者

先述のとおり、豊祭の行事は、大きく神輿の巡遊と神舞に分かれるが、本報告では神舞のみとする。

神舞に参加する人たち

神社の神官及び氏子に当たる集落の男女である。今は特別な参加資格はないが、かつてはこれを継ぐ家柄もあって、楽も舞（演技）も男性だけが担った。今は小中学校の生徒、教員に協力を仰ぐようになった。

役割は、神舞を演ずる人たち、脇座に座し、横笛を奏す人（四、五人）、太鼓を打つ人（同）がいて、交互に出る。

なお、観客も舞台をセツトしたり、観客をもてなすために飲食物を用意する人たちがいる。観客中には、舞台の演者に声を掛け励ます人がいて笑いを誘い、この神舞を盛り上げる。



写真1 降神の儀の前

神舞の準備

湯之尾神社境内の社殿横に神庭と称する舞台を設置する。奥に向かって建っている鳥居に面して、高さ一メートル弱の舞台があつらえられ、舞台四方には御幣のついたしめ縄が張られる。また、舞台に大法幣枝を立て、鳥居に向かって神座、祭壇を設け、供物を供える。その他、地域の人たちが観客にそばなどの飲食物を提供するための準備も行う。

神官による神事と神舞の演目と内容

先ず神舞が始まるにあたって、神社の神官が神前で祝詞を唱え、降神の儀を行う。

現在、二六の演目が伝承されているが、かつては三五番あったとされる。なお、二六番全部を演じるのは、近年は三年に一度としており、あとの二年は一五番程度に限られる

現行の演目名と、何を演じているか概略記す（「一」演目名）。以下舞の内容。演者のうち、子どもと大人の區別をし人数を記す。合体とあるのは、二つ、ないし三つの演目を一つの舞台にまとめて行う形を言う。

- 1 「一番舞」舞庭を清める舞。子ども二人
- 2 「地割」東西南北中央の不浄を清める。



写真3 田の神舞



写真2 一番舞

- 3 「花舞」 荒神が子どもから御幣を受け取り、神前に奉納する。
大人一人、子ども四人。
- 4 「鉾舞」 古事記神話のウガヤフキアエズの命誕生を現す、鉾を持つての舞。大人一人。
- 5 「長刀舞」 長刀を持って舞。大人一人。
- 6 「住吉大明神」 同大明神の舞。大人一人。
- 7 「住吉神楽」 七の舞と合体した形で踊る。子ども二人。
- 8 「御蕃前」 天地万物を称え舞う。大人二人。
- 9 「四方荒神」 神々と荒神の清浄払いの舞。大人四人。
- 10 「四方神楽」 合体。中央に座す荒神と東西南北の神と荒神が十千の方位を清浄払いする。大人一人、子ども四人。
- 11 「半蔵主舞」 東西南北、中央を弓で清浄に払う。大人四人。
- 12 「田の神舞」 五穀豊穡を祈り、田の神が舞う。大人一人。
夜中祝詞 神職の祝詞奏上。
- 13 「御笠」 天下泰平、国土安穩、庶民快樂のため清浄を願う大法会の舞。
- 14 「金山」、15 「氏舞」 合体。男神（金山）が女神（氏）に求婚し、拒否され荒れ様を舞う。大人二人。
- 16 「陰陽」 17 「神武舞」 合体。陰陽（神名）と神武（同）の問答を交えた舞。大人二人。
- 18 「尊者」 太刀を持って、舞庭を清め払う舞。大人二人と子ども一人。
- 19 「龍藏舞」 龍藏権現が五色の幣を付した櫛と、八咫の鏡を持って舞う。大人一人。
- 20 「臣下舞」 臣下大明神が岩戸の前で餅を搗き、天照大神を慰める舞。大人一人。
- 21 「正道独剣舞」 真剣を持ちながらの長演の舞。大人一人。
- 22 「火の神」 23 「大主」 合体。火の神が大主に宿を乞い、断られて怒り狂う舞。大人二人。
- 24 「手力」、25 「戸隠」、26 「太神神楽」 合体。天照大神が天の

岩戸に籠り、再び出てくるまでの神話を舞う。最後に白赤の灯籠を湯之尾神社の神庭に供える。大人一人、子ども一人。

演技の特徴

優雅な動きを見せる舞、一見かたく、力の入った動きからなるもの、セリフ中心の演劇的なものがあり、そのテーマも芸態も多様である。

それと地元の観客から演者に対する励まし、時に批評的な文言の投げかけがあり、演ずる者、見る者の一体感が感じられる。

また、この神舞を解説するために、スピカーから解説者の声が流れてくるが、これは近年の祭り、行事によく見られる傾向で、その場を盛り上げる効果があることは否定できない。

県下の類似芸能

県下には、「神舞」と言われるものだけでなく、およそ次のようなものがある。

- 波留南方神社の神舞（阿久根市）
- 田尾原田の神舞（湧水町）
- 蘭牟田神舞（薩摩川内市）
- 入来神舞（薩摩川内市）
- 平田神社の神舞（肝付町）
- 上止神社神舞（霧島市）
- 重久神社神舞（霧島市）



写真5 龍藏舞



写真4 尊舞

- 清水田日枝神社の神舞（霧島市）
- 鹿児島神社の神舞（鹿児島市）
- 成川神舞（指宿市）
- 枚聞神社の神舞（指宿市）
- 白鳥神社の神舞（志布志市）
- 都萬神社の神舞（大崎町）

これらは湯之尾の神楽同様、濃淡の差はあれ、日向神楽の影響を受けている。

〔意義〕

湯之尾集落は宮崎県の近くにあつて、本神舞は多くの研究者によつて日向神楽の系統と見なされている。

また、かかる伝統芸能の伝承を考えると、演者と観客の一体感も重要な要素となってくる。

〔その他〕

かつては参加資格などに制限があつたが、それでは継承が難しくなっている。よつて、現在は小中学校の協力を得るようになった。

〔参考文献〕

- ・菱刈町郷土史編纂委員会編 二〇〇七 『菱刈町郷土史』 菱刈町
- ・下野敏見 一九七九 『南日本の民俗芸能』 未来社
- ・湯之尾神舞保存会編プリント 二〇一四 『湯之尾神舞舞賦』 同保存会
- ・下野敏見著 二〇一四 『南日本の民俗文化誌七 南日本の民俗芸能誌北薩東部編』 南方新社

（小川 学夫）